W.H.S.W
Aug. 1890
No. 227

女學雜誌

明治二十三年八月二十三日發行
第二百二十七號
一册六錢。每土曜日發兌。

神を憶ふ歌　月の舍忍
新小説 小公子 第一回　若松しづ
青年に警告す　社説

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 227. August, 23th, 1890.

EDITORIAL :—To Young men of the Present Day. Single Women who are not Widows.

MISCELLANEOUS :—Divine fellowship. (A Poem.) A Summer Journal. A Regretted Death. How to make One yen into a Million. Tear-drops. Midnight stars. Amanda Smith. Serenity. An Interview with Mrs. Komatsuzaki. Witticisms on Kamakura.

CRITICAL NOTES:—"Kusunoki." "Ikkōken." "Yūokki." (Three novels of "The Nation's Friend.") On Reading "Ukiyo." Wives of the Representatives and the Leading Ladies of Tokyo. Lady Teachers. Girls going abroad.

NOVEL :—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百二十七號目次

社説　青年に警告す○良人あるの寡婦

雑録　神を慣ふの歌。(月の舍しのぶ)○消夏錄其二○惜むべき女生○一圓を百万圓にする法○涙滴々○深夜の星○アマンダ、スミス夫人の傳○幽還清嶽○小松崎古登女を訪ふ○鎌倉に洒落る

批評　楠木○一口劍○尤憶記○小説浮世を讀む○代議士の妻君東京の婦人改革者○女教員を論す○女學生の洋行

小説　小公子(若松しづ)

寄書　嗚、此不徳發見○洋服○交詢

時事　國學院○保姆檢定法○メキシコ移住策○支那、大鐵道を布かんとす○富岡製糸場○今世界幽生産高○米國に於ける墮落せる同胞○英國の高等女學生○フホーセツト嬢紀念學資○高等女學生健全なりや○印度の斷髮師○通信○無職業の信者諸姉に告ぐ○婦人衛生會の慈善○横濱英和女學校○櫻井婦人會○伊豫今治通信○英國二大學新に女門を開く○女子躰操○縫針慈善會○神智協會の會頭○駿胡記事○週報

Bits of News.

I. The Editor of the "Bombay Guardian," writing of his impressions concerning his visit to Japan wonders that Japanese philanthropists have not yet attended to the ameliorations of the condition of animal life in Japan. We are glad to hear that Messrs Tsuda and Tomita are taking the subject question into consideration.

II. It has already been published that the central phonographic office has decided to employ girls for copying. It is proposed that they shall be required to present certificates of public schools or have equal qualifications, and that the preference shall be given to those from the family of officers already under employ.

III. Now that the excitement attending the election of representatives being over, the Prohibition Societies have begun to resume their labor. The young men of the Kanagawa Pref. are going about in and about Yokohama to obtain influential names preparatory to presenting a memorial to the new Governor concerning the subject. Mr. Shimada as well as Mrs. Nakajima have already given their names.

We beg to give notice that the "Woman's Magazine Office," has moved and communications thereto should be addressed as follows:

No. 6, Rokubancho,
Kojimachi-ku,
Tokyo.

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百二十七號
明治二十三年八月廿三日發兌

社説

青年よ警告す

ロングフエローの歌よ、學生と社會と、古來大ひなるの關りを有す、てふ秀句あり。味ひ深長にして、趣むき極まる所ろを知らず。

茲に一青年ありとせよ。彼れ多年螢雪の苦を淩ぎ、恙がなく學業を卒へ、將に社會に向ふて打出でんと爲す、此時自から信ずること百万の强軍を率ゆるが如く、前途勝算を思ふて憂患を覺らず、滿腔鬱勃、有爲の氣象噴火山中熱々の烈火の如し、歌ふらく、睥睨蜻蜓州首尾、欲向何處試我才。此時に於て、其成功何如あらんと掛念するものは、啻に父兄近屬隣人の類ひのみにはあらず、社會の萬目は眼こを張りて其の馳せ塲を走る何如あらんかを凝視し、天に於ては天の使ひ、彼れ願はくは榮光あれよと祈り、地に於ては魔鬼の屬、彼れ願はくは墜落せよと待ち構へたり、老人も振反りて見、后進も足を爪立てゝ望む。此青年立脚の地は、眞とや全社界億兆人の眼の集點なり。

吾人試みに之に問はん、君は目前の社界を何如に爲さんと欲する乎。君は此社會の實相を觀、之れ邦家百年の爲めに利あり、又た蒼生四千万の爲めに益ありと確信する乎、而して此確信を以て現社會を贊美し、此の社會の爲す所ろを助長していよ〳〵今の實相を維持增大せんとする乎。もしくは君が慧眼すでに八方に於て世の惡弊を看破し、宮より藁屋迄、天上より地下迄で、官員より車引迄で、到る所に放置することを得ざるの大病患あることを確認したる乎、而して君は此の病處毒處に向ふて何如に處置せんとするか、之を放任して顧みざるのみならず、更に其濁々の波瀾中に游泳していよ〳〵其波を濁さんとする乎、もしくは全心全力を盡し其一點一滴をだに淸澄し、社會の惡潮を狂瀾の中に挽廻して身后百千年大改革の一根本だに、短世五十年の間に出來べき丈け築き置くとするが如きの決心ある乎。君抑そも、何如に思ふ。吾人先づ之に向て其確答を請はずんば、止まず。

夫れ、今の社會は驚ろくべきの社會なり、或人は之を目するに不道德の社會と稱するとも尙ほ辭ば足らずと言へり、實に不道德と單稱すべき丈けの社會にはあらざる也。田舍に在る人は都門の樣子をくはしくは知らざるべし、都にあるとも事情に通ぜざる人は其眞景を承知せざるべし。然れども今の社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

會は實に驚ろくべきの社會なり。或人、支那の官廳の事を報告し、一顯官に面會せんとするも、先づ門番に若干の賄賂を與へざる可らずと云ひ、又た、朝鮮の政府の事を報告し、其裁判の不公平なると、及官員の私利私慾に貪ぼりて厭なきの樣を擧げ、共に至つて珍らしき事のやうに記載せり。啻に之のみならず、新聞紙にも通常の會話にも共に珍らしき事の樣に言はやし、之と共に日本國の如何にも開化したるやうに心得、之を誇るものあり。吾人は此等の談を聞く毎に、其人等の何如にも樸實なるを愛すると共に、亦た其現社會の事情を知らざるの愚を憫れまずんばあらず。政治上社會上に於て、日本人抑そも何程の優る所ろありて、支那人及朝鮮人の上に誇居せんとする乎。

ソドム、ゴモラ尙ほ義人なきにあらず、故に吾人は此の神洲に惡風惡俗充滿すとは言わず。啻に然言わざる耳ならず、極惡の人の少なきこと日本の如きは盖し文明國中に比類なきものと信ず。日本にはすさまじき偉人物なき代りに、又驚ろくべき惡人もなし。特に地方邊鄙に至りて其土人に接すれば、各人大抵小君子の風あり、日本は今尙ほ君子國の名を頂たき居りて差支へなきもの丶如し。

但だ吾人が極めて慷慨する所ろのものは、所云る社會、もしくは舞台の上に現はれ居る役者仲間の不德義なること也。朴直なる平民は依然として朴直なり。たゞ政事家と云ひ、事業家と云ひ、金もちと云ひ、商人と云ひ、議員と云ひ、教育者と云ひ、文學者と云ひ、今の社會表面に游泳して得々たる人々の、如何にも下賤卑劣なるを見るに忍びざること是れ也。

左れば、今后新たに社會に打出んとする青年は、此の先輩の後つぎとなるべき乎、若くは其別家者となりて獨立獨行すべき乎、即はち其仲間たり友たるべき乎、若くは其反對者たり敵たるべき乎、一言するに彼等先輩の事業功名に摸倣すべき乎、抑そも亦た之を打破し攻擊し裂倒すべき乎。吾人儼然として此の大疑問を問ふ。

青年よ、君、彼等先輩の如くに在りたしと思はゞ、即はち其の如くあるべし、其法決して六かしき事にあらず。政治家と爲るには、別に學問は入用ならず、但し政治は道德の外にありと云ふことを確かに承知し、權謀術策を用ひざるは愚の極なりと覺悟し、一事件に熱心ならずして何事も能き程になし、万事に變通して、古風の廉直節義など云ふことを業々しく言わず、成べく眞心の制裁より離れて爲したしと思ふことは氣儘

に爲し得るほどに不道德にてあれ、斯の如くんば、今の政治家たることを得べし。議員となるの工夫は、極近頃の經驗に徴して明かに分るべし、別段抱負する所あるを必要とするにもあらず、左して施政改革の意見あることを必要とするにもあらず、政治上の學問及び經驗なかる可らざるにもあらず、左りとて財產名望の必らず切要なるにもあらず、たゞ其時に臨み、間際に當りて、利巧に立まはり、金を遣ひ、反對者を陷いるゝの猾策を案出し得れば足れり、斯して議員と爲りし後は、馬車に乘ることと、手を擧ることとに注意すれば夫にて足れり、今の議員となること必らずしも難事にあらず。又た今の事業家若くは紳商など云る、官員の如く商人の如く太皷持の如く御用金引負手の如きものとなるには、必らずしも、大ひなる計畫と、非常の企業心と、鋭敏なる觀察力と、强剛なる忍耐心と、電速火急なる決斷力とを必要とするにはあらず、能く西洋カルタ、トランプ、花合せ、碁、將棊、淸元、常盤津、義太夫、舞、カッポレ、甚九、演劇の類ひ、一と通りの十六藝に達し、何事によらず、殿のお相手となることを得、事業あるの日、利益を折半して其半を恩惠ある世話方へ呈するの秘傳を心得居らば、棚より牡丹餅の落る類ひにはあらず、空氣を化へて黃金と爲す程の、非常に利益ある仕事續々として出で來る也、事業家となり商人となること必らずしも六かしきことにあらず。故に金もちと爲るの工夫も、謙勉力行を要せず、綿密なる預算勘定を要せず、月々損するとも、年に於て益することありと云ふ、所云る管子の不思儀なる利得法忽然として湧出すべし、即はち今の金もちと爲るには、勘定外の勘定により、四則平算の常理に合ざるもの多し、只だ此一事を心得置く時は、金もちと爲ること敢て難きにあらず。敎育家と爲るにも、古人の如く、十年學を思ひ、終身德を思ふが如き苦心は少しも入用なし、己れが學窓に在りし時の講義錄を操反して敎授すとも、原書を直譯すとも、又は自己にも未だ明断あらざることを口授するとも、何れにても宜し、敎場に於ては只だ其時間内丈け辨じつゝけ、鐘鳴ると共に直ちに退出し、生徒の名も顏も覺へ居らざるとも、宜し、敎員は月給の金に對して其講義を切賣にし、生徒は其月謝の金を以て、直譯文又は古き講義の寫しものを買取る、之れ即はち今の敎育也、生徒の討論會に臨む丈けにても金若干を要す、試驗の點を増減するに付きても金若干を要す、敎師の一居一動悉とく黃金の報ひを得、敎師の爲す所にたゞの仕事あることなし、何處に至るも銅臭を

呼吸せずんば止まず、教師と爲ると苦しくもつらくもなき也。文學者と爲ると特に易し、西洋の文學者は思ありて之を寫し出さんが爲に文を綴る、然れども今の日本の文學者は、別に新らしき思想を入用せず、矢張り反譯にても、又は五もくにても、只他人の考を其儘にか又は隨分に調合して、之を調子のよき、手ある、輕薄ある文字にて寫し出せば可也、而して成べく都の文學會に列し、先輩の文學者に親くあり、扨て何ものか西洋の趣向を翻案したる小説一二篇を作り、友人等に乞ふて其批評を書かせ、時には自から匿名にて評判記を作り、之を新聞紙に投じて、世人の注目を惹く也、斯て、身のまはり、言葉つき、様姿等を、一種異様の粋もしくは風流など云へるの様にやつし、切りに世人を斥ぞけて之を俗なりとすべし、之にて文學者たることを得る也。以上、その何れの資格に達せんにも、有名あらずんばある可らず、有名となるには、新聞記者に懇意となると、若干料を寄附して雜報に出て貰ふ事、時事通信社若くは新聞用達會社に投書する事、自から電報料を拂ひて其動靜を電通する事、凡そ此邊の才覺を運らし、然して新聞紙上に評判を受るの工夫を爲す時は、乍ちにして有名となるなり。あゝ、此等の諸方何の難きことかあらん。

青年よ、君は亦た此亞流の相續者たらんとする乎、然らば第二世の日本亦た望みなし、吾人は更に第三のゼネレーション(代)に向つて望みを立てずんばある可らず。然れども、請ふ見よ、今の日本社會如此にして抑そも可なる乎、邦家如此にして盛隆なるべき乎、同胞如此にして剛毅なるべき乎、あゝ法律は全備せりと云へり然れども如何なる判事其人ありや、學校は巍然として聳へたり然れども如何なる教育者其人ありや、國會は將に開かれんとす然れども過半の議員はすでに政府黨に偏せんとするの兆候あり、請ふ眥を決して長察せよ、邦家前路不容易、奈四千餘万蒼生。青年よ、君此の弊風を憂ひ、之を改革せんとせば、先づ第一に覺悟すべし、君には名譽あるなし、何んとなれば今の世に逆らふが故に今の世は君に譽れを與ふることなけん。次に、覺悟すべし、君は貧窮なるべし、何んとなれば君は今の如き事業行はるゝの世に大ひなる富を得ること難ければ也。最后に、覺悟すべし、君は到る所ろに敵を受け、大ひに困難すべし、何んとなれば、君すでに世の狂瀾を返し、世人を罵責痛戒して其惡を改ためしめんとす、君元來世のものにあらざるが故に世之を惡むこと勿論なれば也。此に入れば彼を得ず、彼に入

れば此を得ず、此彼併せ得んとして、熱くもなく冷たくもあきは、極々の卑劣人種なり。

青年の目前、今ま明らかに二途あり。其易きものに就かば、君は肉に於て平安あるべし、金に於て安樂あるべし。其難きものに就かば、君は幾度びか擧世の大波瀾に逆らひ向ひ、或時は舵を裂き、或時は檣を折り、數たゝび沈沒陷溺の憂ひに臨むとあるべし、安樂と、名譽と、富とは言ふ迄もなく君が身邊にまとはじ。君請ふ二者の一つを擇べ、而して其の結果する所ろを、安んじて受領せよ。君何れに行かんとする。君、其易きに就かば、君は安樂あるべし、而して邦家の前路を如何にせん。今の時世、吾人は只だ新鮮なる朽ざるの青年をのみ待つもの也、而うして青年も亦た彼の先進者の如しとせば、日本國の爲めに吾黨今後それ誰の應援をか待たん。實に今の日本社會は不容易なる社會なり、王政維新ありたりと云ふと雖ども、左して幕府の末期に異なる所を見ず、學校内にすら賄賂盛に行はる、其他は推して知るべし、月給々々と囀づるの鳥、金々と鳴くの牛馬、名譽々々と叫ぶの鷹、權力々々と吠ゆるの狼はあり、未だ人間を見ず、もし勝海舟氏をして今の世を評せしむれば、將に其前年昭德公靈前に慚愧口演せる弔詞をくり返して云はんと欲す、

臣安芳竊不敬を冒し將軍の靈前に拜告す、現時邦内の多故將軍在世の時より甚はだ敷、其跡大に昔時に反するも、人心の激昂情實に到りては昔時に異ならざる如し、…… 星移りて今年廿七閲歲、今や形勢古に異にして文明と唱ゆれども、邦内猶ほ古の如く、藩閥を破り官吏を忌憎し團結して是を攻擊せむとす、官吏も亦暗々裏に團結し藩閥益固く、昔時幕吏の攻擊よりして合力其位置を保ちし如く、同一轍に出でざる也。

吾人亦た之に同ぜざるを得ず、あゝ日本の現社會は如此き也、有爲正義に動くの青年よ、請ふ憤發大怒して長決する所ろあれ、雲井龍雄、詩あり、

妻妾是知君是忘。此時社稷奈㆓存亡㆒。願將㆓慷慨哲生涙㆒。洗盡○堂姦○腐。

良人あるの寡婦

天と濟み地と定まり、五の道、おのがじゝ所ろを得しより、妹脊のあからひ絶ゆるとなし。然るに未また嫁がずして夫あるの女あり、是れ惡むべきの極みならん、左れど既に嫁ぎて尙ほ夫なき女に至りては、悲しきと極まる所ろを知らず。目を擧て見よ、夫あるの寡婦、到る處ろに多きにあらずや。吾人、今の男子が其妻を愛するを見るに、未だ容易すく之を目して眞とに愛すと云ふと能はず、譬へば寶玉を珍重するが如きはあり、亦た破れ物を秘藏するが如きはあり、亦た子供

を可愛がるが如きはあり、亦た片環者を憫れむが如きはあり、則はち、之を珍重す、秘藏す、可愛がる、憫れむと云ふとを得れども、未だ目して之を愛すと言ふと能はず。彼の諸々の情は、愛に隣る、左れど未だ眞の愛たると能はざる也。

大凡、愛とは、妬まず、誇らず、驕ぶらず、非禮を行なはず、己の利を求めず、輕々しく怒らず、人の惡しきを念はず、不義を喜ばず、眞理を蔑がしろにせず、能く寛忍して人の咎を計り、万事を包容して事々に信じ且つ望み且つ忍ぶものなり、之を眞の博愛と云ふ。而して、夫婦の相愛するに至りては、必らずや、更に三の性狀を具備せずんばある可らず、苟くも之なくんば、或は人を愛すと云ふとを得、然れども夫婦相愛すと云ふと能はざる也。

所云る三とは、先づ己を捐つるの情、次に他を敬するの情、最后に歡樂憂苦好惡進退を同一にするの情、是れ也。大凡そ人は、其愛するものゝ爲めに何者をか捐てんとを欲す、盆栽を愛するものは其錢を棄てんとを欲し、友を愛するものは之が爲めに何事をか爲さんとを欲す、之れ其盡力を捐つる也、而して、其の之を捐つるや敢て苦しきにはあらず、之を捐てずんば寧しろ苦しきのみ、夫れ尋常一樣の愛にして倘然り、其妻を愛せんとするに至りては、必らずや最とも大ひなる義捐の念なくんばあらず、世の中のたはれたるとは更にも言はず、我儘も、我慾も、之が爲には喜んで捨んとを欲す、富貴も榮利も、地位も名望も、之が爲めには物の數ならず、若し妻を愛するの情と兩立しがたきに於ては、之を棄て去ると、舊き草鞋を脫ぐに異ならず、吾人は妻に迷ひ、其色に溺るゝを以て善き事とし、大丈夫が步むべき只一つの道を蹈たがゆるを以て貴むべきとと爲すにはあらず、妻を擇ぶには宜しく愼嚴なるべし、道を守るには宜しく毅然たるべし、たゞ吾人は妻を愛するに於ては宜しく眞の愛あるべしと云ふ、而して眞の愛には必らずや犧牲の念ひなかる可らずとは云ふ也。又妻を愛するには、敬意なかる可らず、敬意なきの愛情は、人を憫れむなり、人をヲモチヤにする也、人を己れの樂しみの爲めに好くなり、左れど未だ眞とに愛すると能はず、特に妻を愛するに於て之を敬するの意を含まざるときは、其愛や決して純潔なる能はず、たとひ暫らく純潔なりと云へども、能く久しきに續くと能はず、遂には我意を以て彼女の意ばせと爲させ、我慾を以て彼女の欲する所ろと爲させ、之を己が思ふまゝに扱はずんば滿てりとせず、斯の如くんば是れ彼女を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

擧げて己れにかしづかするのみ、或は之を妾と云ふとを得、未だ眞の妻と云ふと能はざる也、左れば妻を愛するの愛には先づ敬意なくんばある可らず。且や、人を愛するは、之を愛するも尙ほ彼れの好むまゝに行はしむるとを得、然れど夫婦は朝夕終始一室の内に同住し、二つの身、二つの心、二つの情けを以て、只一の事を爲さんと欲す、其心情相合して好む所ろ、悅ぶ所ろ、感ずる所ろ、殆んど同一ならずんばある可らず、即はち夫婦は幾分か氣質を異にすと云ふと云へども、其感想、理想、に於ては、正に同一ならずんばある可らず、之を欠かば眞の愛久しきにつゞくと能はず。

夫婦の愛必らず、此の三つの情なかる可らずと云ふ。而して今の夫婦を見るに、能く此情を備ふるもの極めて尠なし。妻の我儘なるによりてか、夫の頑惡なるによりてか。吾人之を思ひ想ふに、其の失、男子の身に歸せざるもの殆んど稀也。

男に女らしきものあり、如此く女にも亦た男らしきものあり、左れど、女の男らしきは、男の男らしきに接すれば多くは直ちに直るものなり、牝鷄の晨たするは牡鷄の失せたるのちなり、女子の女らしからぬは、世に偉男子の少なきに由る、此に於てか、取かへばやの歎あり、然れども、女子は其性英雄崇拜に偏す、苟めにも大丈夫ならば之に服せずと云ふとなし。左れば、男子にして若し男子ならんには、妻之に服せざると少なし、女の性元と温和しからんとを欲す、女らしくせんとを欲す、故に良人にして若し剛毅謹重ならば、妻は之に隨はずと云ふとなし、其隨ふや屈するにあらず、實に喜びて隨ふ也、彼女は本來隨はんとを喜ぶもの也。

女は貞節の人なり、彼女敢て暴飲するとなし、况して放蕩するとなし、若し良人と深く相愛し、ホームの樂しみ極まる時に於ては、彼女は最早他に一物も望む所ろなき也、彼女は何如にもして夫を愛せんと欲す、又何如にもして夫の爲に益せんと欲す、彼女は本來爭ひの子にあらずして平和の娘なり、不和は其くるしき限りにして、愛は其自然に歸へる所也。

左れば、夫婦和睦せず、伉儷相愛せざるの時、細かに其源づく所ろを察すれば、其因大率ね男子にあり、女子にあるとは極めて稀れ也。たとひ之あるも女子に存するは其弊を除き易く、男子にあるものは其失除きがたし、到底男子先づ其務を盡さゞるによりて、家内多くは平和ならず。

我妻氣儘なり粗暴なりと云ふ乎、汝ち先づ自ら男らしくせよ、妻は喜こびて女らしくなるべし。我が妻愉快ならず、不平多

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

むと云ふ乎、汝ち自から其行ひを愼しむべし、自から彼女を愛せずして彼女何如にして愛を許せん、彼女は元來汝ちを愛しがたきに苦しみ居るもの也。

自分は放蕩して、妻の愛深かゝらんを欲し、自分は何をも與へずして、妻の一身を犠牲にせんことを欲す、賢女傳を讀み聞かせて云く、賢女如此し、貞婦如此しと、安んぞ知らん、女性は大抵賢女貞婦たることを得べきものあるを、男子先づ之を碎きて鳳雛鶴稚を其幼なきの内に殺ろし、而して之を鞭撻し聖泉を放たしめんことを欲す、愚も亦た太甚しからずや。

妻の愛を引出すは、たとへは乳房に口つくるが如し、一と度び其泉に接して吸ひ出せば、愛は混々として溢れ流る、妻は夫を愛せんことを欲す、夫の爲めに命ちを棄てんことを欲す、而して良人は何ぼ其愛を引出すの緒を知らず、或は之に衣物を與へ、或は之に演劇を見せ、或は之に甘言を言ふ、而して自己は放蕩亂暴して、妻の愛深からんことを求む。妻は子供にあらざる也撫くと能はず、妻は能く眞偽を辨ずる也氣休めを言ふと能はず、男子先づ其愛の緒に接せずんば遂に其愛を引出すと能はざる也。吾人は今の男子が滔々として其の妻を愛せざるを見る、彼等は言はん、吾等は左樣なる愛し方を知らずと、蓋し先づ愛せざれば、其の愛し方を悟ること能はざる也。

日本男子大率ね然り、故に婦人之に嫁して多くは其愛を滿開せず、胸中に蟠かまる戀思を寄するの所ろなく、澤々たる衷情年と共に化石して、老婦一生愛を露はさずして死す、たとへば芳野の櫻万朶に蕾を着け今一日の温光を待つに似たり、此時に於て男子先づ一温氣を發てよ、櫻色爛熳乍ち滿開滿香すべし。左れど、悲しき哉、最后の温たまり乏しくして蕾其儘にしぼみ、衰落して地に墜みる、妻の戀々たる愛情は、伸びずして枯れ、生ひずして死す、我國植物多し、左れど妻の愛は恐らく喬々たる大木とはあるまじ。蓋し、日本女子は嫁して未だ良人に接せざるもの也、あゝ何んぞ夫ある寡婦の到る所ろにをびたゞしき哉。

讀西行和歌。

莫對愁時月。何爲又泣人。
袖襟珠耐掬。自怪涙痕頻。

龜井昭陽

雜録

神を憶ふの歌

月の舍しのぶ

由井が濱邊の森かげにて、教へ子等が "God is love" の歌を合唱するを遙かに聽き、其同じ譜にてよめる長歌。

（一）
うち寄す波ぎわ　かぜ吹く木梢
さけびて歌へり　神はとふとし
　われらも尊とき　み神を寅れん。

（二）
深山のたにみづ　野末のはなも
むせべり笑へり　かみは愛なり
　われらもともに　み神を愛せん。

（三）
乙女等つどひて　しげる木かげに
たのしく歌へり　かみはちゝなり
　われらもともに　み神を贊へん。

（四）
律法はまさなし　ひとは恃まず
とこしへの主や　かみは巖あり
　われらはつねに　み神に仕へん。

（五）
變化むじようは　浮世のなみ路
盛衰るてんの　夢はやぶれぬ
　われらは天津　み神に詣らん。

消夏録（其二）

雲峯生

○稻村が崎

靈山南に延び、海中に突出する事數町、之を稻村が崎といふ、岬端聳る所斷岸絶壁、水面を拔く十餘丈、岬麓海水深さ幾仭、俯して望めば緑漠々、怒濤岩に激して鳴號する事晝夜絶たず、聞說く昔し新田義貞鎌倉を攻むるに當り三面山を以て圍繞するが故に此に入るを得ず、此處に至つて名刀を水中に投じて上天に禱る、水則ち退きしと、事實の眞僞は我得て之れを知らず、されど是精心到る所ろ何事が成らざるべきとの意を偶する傳說ならんと心づき、一首をものす、されど是拙中の拙、未だ心に滿たず、暫らく優れるものを得るまで記に存す。

　もののふのみたまもこもるつるぎには
　　世のあだなみも恐れたりけん

若今代の狀態を以て推せば海水退くべきにあらねど、幾百年の星霜を經たる後いくそくばくの變化を爲しけん、靑松綠樹忽ち枯て薪材となるも一朝のみ、泰山忽に崩れて深洋と化するも片時のみ、昔の樣は如何なりけん、もとより今日もて云ふべきに非ずかし。

○七里が濱

白砂青松相映じ、白波緑水に生じ、清風白波より起る、東に海水十四丁を隔てヽ鎌倉の古趾見ゆ、砂岸西に行く事四十二丁、昔六丁一里の制を支那に採る、故に七里濱と云ふとぞ、是亦眞僞を知らず、濱砂盡る所海水一葦を隔てヽ江の島あり、日漸く晩れに近からん時、ふとく山風に誘はれつ、獨り杖を曳て七里が濱に涼を求む、余の至る所は濱の東端、稻村が崎の西麓に當る、海水遙々南に連る歸帆影裏夕陽明滅の時、波濤茫漠たる所に江の島や伊豆の山々を眺む、佳景云はん方なし、日晩れ、波の上遠く暮れぬれば漁火東西に現れ、滿くる汐に波愈怒號し、萬雷吼るが如し、寄てはかへす白波、白砂洗ふが如く、風脚下に生じて蟬の羽衣打なびく、誠に此時は快絶清絶。

夕立の過ぎし汐路の夕風を
　白帆にうけてかへる船かな

とは是一日余が此濱に至れる夕つがた、偶一陣の海風と共に一村夕立過ぎし時口つさみつる一首にぞある、まだ記憶に止りければ斯くはかきおく。

○江の島行

一日江の島にものせんとて思ひ立つ、七里が濱、白砂波清き所を歩して行く、波退けば渚に近く歩し、波至れば退て歩す、凉風清風坐ろに余に快し、獨り歌ふ天日熱を失ふかぞ。

惜むべき女生

信友、淺井柞女史、過る日余が家に音づれ、常になく悲し氣にて、辭ば雄々しからず、其故を問ふに、弟子鈴木志穗子を失なひ、一身の爲め、婦人矯風會の將來の爲め、及び國家の爲め、深く痛惜すと歎かる。己れ其心を推して、切に情を同にしたるが、此頃ろ、矯風會雜誌第二十八號に、其傳を載たるを見、女史が歎きの故あるとを悟りぬ。われ未だ彼の子に會せざりしと云へども、同じく深く惜みて止まず、讀む人も亦同感あるべしと信ず。其傳の中ばに云く、

同子が長榮女塾に在るとき同時に當校に一女生あり動作輕佻擧止傲慢尤も不品行にして如何ともするあたはず常に志穗子に抗し百方讒害無實を捏造して他を煽動せんとす訓誡數次するもなほ悛ためざるを以て老婦斷然心に放逐を決し衆敎員に謀るに至る適々女生の病るに際し其の實行を猶豫せり衆生平生の擧動を惡み敢へて省りみるものなし志穗子時に室長たりしが看護至らざるなく丁寧病に侍し夜帶を解ず卧褥穢器みな自からこれを洗滌するに至る病愈るに及

んで女生深く其高義に感じ半生の過失を悔ひ泣て自ら責るに至り擧坐感動せざる者なし志穗子赧然只「どう致しまして」の一言を發せしのみ平素の擧動概して如此 憶志穗子の如は古の遺愛と云ふべし、其師範校にあるや滿四ヶ年未嘗て過ちあらず舍監常に老婦に語て曰く「鈴木志穗は最良の好生徒なり他日必ず無比の良教師とならんと」卒業生官の指令する所に從て各地に就職す然に同窓皆都下に奉職せん事を望む志穗子が常盤校に聘せらるゝを聽き之を羨む者あるを聽舍監に請て曰く何の地にあつて職を奉ずるも國恩に報ずる固より同じ願くは望む者をして志穗に換しめよとされ共常盤校長獨望みを志穗子に屬し遂に該校に就職するに至れり。

家人、其臨終の樣を知らせたる手紙とか云ふものゝ末に、

十八日午後七時頃より俄に病勢相募り同七時三十分に至り「唯文部省に對し盡すべきの義務を果す能はざるを遺憾とす、されど神は足れりとして召し給ふなれば憾むる所なし」との一語を殘し溘焉瞑目いたし候本人生前の行爲に付ては兼て御承知の如く幼少の頃より東京に在り家居の日は僅に暑休年末の休暇位に止候者故郷里にあつては却て可申述程の事は無之候得共曾て逢原分營在學中一傘を購求せんとするに當り殊更に價直の廉なる者を擇び曰く隨身の具の美なるは人の欲する所なれ共若し他人の之れを借らん事を求むるに方り吝惜の情なきを免れず唯賤價にし堅緻の者を得て衆庶の便に供するに若かずと申たる事有之候右は一時の言にして平素の用意却つて能く此傘の如くなりしや否は知悉いたし兼候云々。

之れ倚は十三の年の事なる由。天もし之に命を假さば、后來由々しき、女傑と爲りしものを、最とも〳〵惜しきとにてありける。

一圓を百万圓にする法

山下石翁

物を疎末にする癖ある時は、日々莫大の損を爲すものなり。目に見ゆる丈けの損は倚ほ少なし、目に見へぬ損は小さけれども相集まりて非常の損となる。元來物を疎末にすると云ふ一つの惡習より、測る可らざるの大損失を生ずる也。

特に經濟の事は、一厘一毛にても疎末にせざるを以て、富を致す第一の心得とす、もし此の心得なくんば、たとひ少々物を安く買ふとも、又は少々物を儉約するとも、他に於て物の費へて無駄に損失するもの夥たゞしく多し、迚も眞の儉約は出來ぬものなり。

凡そ人は小さきものを小さきものと思ふがゆへに、疎末にする考へも出て來るなり、成程小さきものは其の時こそ小さけれ、彼の大ひなるものは即はち此の小さきものの集合したるものに外ならねば、小さきものは決していつ迄でも小さきにあらず、故に何程に小さきもの、何如ほどに少なきものにて

も、決して之を疎そかにす可らず。他日は大きくなるべし。小供は小さしと言ひて殺さば、世に大人となるものは無けん。故に先づ少小のものを至極綿密にすれば、大ひなるものは自から倹約となり、富は日に〳〵集まるべし。

一例を擧げて其驚ろくべき理はりを示さん。凡そ金利の殖え方は五年に一倍と申し、極々手堅き商買に從事するか、又は月一分ほどの利足にて貸出すとも、金は五年毎に必らず其倍となるもの也。即はち一圓の金は五年目に二圓となる。此は尋常の事にして珍らしからず、若し更に賢こく鋭どく之を用ゆる時は、三四年にして倍となると顯りに之れ有り。左れど、此には其尤も低き計算を用ひ、五年倍の定めにて富を增すと假定せよ。一圓の金は百年の后に至つて一百余万圓とはなる也。即はち二十才にして一圓の金を倹約し、之を利益ある途に用ひ置けば、身はたとひ七十才にして死すとも、其子の代に至りて、百万圓の身代となるべし。是れ驚ろくべきことにあらずや。

斯く言ひても、人は餘りの事として信ぜざるべし、故に左に其の金のましやうを示す。一圓の金の五年倍にて、子を生み孫を生むの狀、下の如し、

五年目よ……二圓
十年目よ……四圓
十五年目よ……八圓
二十年目よ……十六圓
廿五年目よ……卅二圓
三十年目よ……六拾四圓
三十五年目よ……百二十八圓
四十年目よ……二百五十六圓
四十五年目よ……五百十二圓
五十年目よ……一千〇廿四圓
五十五年目よ……二千〇四十八圓
六十年目よ……四千〇九十六圓
六十五年目よ……八千百九十二圓
七十年目よ……一万六千三百八十四圓
七十五年目よ……三万二千七百六十八圓
八十年目よ……六万五千五百三十六圓
八十五年目よ……十三万一千〇七十二圓
九十年目よ……二十六万二千百四十四圓
九十五年目よ……五十二万四千二百八十八圓
百年目よは……一百〇四万八千五百七十六圓

涙滴々

ある夫人の玉梓の奥に、

……かゝる我儘なる妻何處にあらん、時々は却つて無き方あなたの幸かとも思ひ、昨年以來何のお手助けともならず病其外の爲め御苦勞をかけし事幾千ぞ、お痛ましく思へばたゞ悲しく居たゝまれず相成候、ア、〳〵モウよします、此后は心を勵まし丈夫にありて、成るべく惡しき癖を改ため、あなたのお志を幾分か思ひ遣り、おたすけ申し、後は數にもあらぬものを愛し玉はり導きて靈の境界に進ませ玉はりしを神に謝しつゝ、靜かに就眠いたし申さん、思ひ迫りて書つゞくると出來ず、余儀なく筆をとめ申候。

涙のあと點々、文字にじみて讀みがたし。

深夜の星　かすみ

○蟬かしまし

三伏の日、さかりの暑さにたへがたくて、

蟬あつし、松きらばやと、おもふまで。

と口ずさびし日數も程なくたちかへりて、やゝ秋風に其聲のへり行く程、さすがに哀れにおもひかへして、

死にのこれ、一つばかりは秋の蟬（也有）

○源家夢の跡

鎌倉の濱に遊び、朝たに磯を踏みて足あとを附すれば、夕べに波之を洗つて一物も無くす。前にすさまじき音して打よせたる邊りは、今ま、二三段の向ふに引退ぞきて、波ひそ〳〵とさゝやく。顧みて、八百年前の幕府を想へば、鶴が岡八幡詣づる人寥々として、源家北條のやしきあと青き苗大海原に似たり。荷田春滿の歌に、

けふ見れば、きのふの淵はあさか瀉
汐のみちひぞ、世の姿たなる。

農夫田を耕やせば、白骨あらはる、草を燒けば墳墓あらはれる、是れ此れ舊時の古戰場。芭蕉、句あり、

夏草や、つはものどもの、夢のあと。

○淵明の詩妙

陶詩の今に存するもの多からず其集を觀るに精粗相半せり世人唯だ其詩の高妙なるを贊歎するのみにて其精粗を分つと能はず是れ唯だ虛聲に吠るのみにして其實を知らざれば也陶詩も善き詩は皆心を用ゐて鍛錬せしものと見へたり其粗作は皆な意を用ゐざるもの也此處は古今別なし俗人は淵明などは詩に心を用ゆる人に非ず只だ口に任せて言ひたるが自然にて善きと思へり詩を知らざるの至り也（淡窓詩話）。

○高眼の書生

方孝孺の詩に、

我非今世人。空懷今世憂。所憂諒無他。慨想禹九州。
商君以爲秦。周公以爲周。哀哉万年后。誰爲斯民謀。

書生何の代か此の歎あらざらん。

○用心御用心

一休禪師紫野におはしゝころ、人の書を求むる者あれば、御用心と書きて與へ玉ひぬ。しひて他の事を求むる者あれば御用心〳〵と幾つも書き玉ひ、又上に只と云ふ一字をそへて只御用心とかゝせ玉ふこともありきとかや。いともおも

しろく、すべての事にかよひて教訓とはなりにけり。予もまた夫にならひて、用心の二字を合せて一字につくり書けり。其文に云く、

鳥渡見れば忍ぶに類し、麁忽に見れば思にひとし、遥かに見れば思ふに似たり。（柳沢淇園）。

○洋學生、漢學生

儒者に皇國の事を問ふに、知らずと言ひて恥とせず、から國の事を問ふに、知らずと云ふをばいたく恥と思ひて、知らぬ事をも、知り貌にいひまぎらはす。こはよろづを、唐めかさんとするあまりに、其身をも漢人めかして、皇國をばよその國の如くもてなさむとするなるべし。されど、なほ唐人にはあらず、御國人なるに、儒者とあらむもの丶おのが國の事しらであるべきわざかは。但し皇國の人に對ひては、さもあらむも、から人めきて宜かんめれど、もし漢國人のとひたらんには、我はそなたの國の事は能く知れども、わが國の事は知らずとは、さすがに得言ひたらじをや。もし左も言ひたらんには、己が國の事をだにえしらぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべきとて、手をうちて、いたく笑ひつべしと。本居宣長は言ひぬ。今の世の洋學者又は后の世の事斗り理想して今を知らぬ人、もしくは昔しの事のみ言ひて今を辨まへぬ人は、大率ね宣長が笑ひを蒙むるべきの人なるべし。

奴隸志を立つて傳道師となる

亞弗利加人アマンダスミス夫人の略傳

みれ子

兄弟よ召を蒙れる爾曹を觀よ肉に循ふ智慧あるもの多からず能あるもの多からず貴きもの多からざるなり、神は智者を愧しめんとて世の愚かなる者を選び強き者を愧かしめんとて世の弱き者を選ぶ、また神は有者を滅さんとて世の賤しき者藐めらるゝもの即ち無きが如きものを選び玉へり、これ凡ての人神の前に誇る事なからん爲なり、

嗚呼これ千古不滅の眞理といふべし、上帝人類を世に置き、一視同仁以て此を惠む、神僕に選ばるゝもの豈白人種に限らんや、吾人は今彼の眞理を亞弗利加の黑奴アマンダスミス夫人に於て見る、今其傳を左に略叙すべし。

夫人は紀元千八百三十七年メートーランド州ロンググリーンに於て奴隸の家に生れ、サムエルベリー氏に養はれて氏を父と稱せり、夫人は生來其身につける金銀財貨を有せず、されど更らに貴重なる心靈上の財貨を有てり、其の祖母を始めとし、双親共に熱心忠誠の基督教徒ありき、殊に祖母は力ある

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

祈禱を爲すを以て知られたり、其母此性を享けて熱信高德の婦人ありき、此美質遂に夫人に遺傳す。

幼き時より學校に入りて學ぶの機會を得ず、ペッリー氏に養はるゝに至つて僅かに三ヶ月の間學校に入りしのみ、敎育なく智識に乏しきが故に宗敎上の事に至つても容易に解せず、久しく考慮心配の後漸く眞誠の信仰を得て悟れり、始めディヴァイン氏に嫁し、氏の逝去に遇ひ、三年にして傳道師スミース氏に嫁せり、亦氏も逝きぬ、子女を擧ぐる事前後五人、一女を餘して皆長逝せり、若世上一般の思想より云はゞ夫人は誠に不幸の者と云はざる可からず。

夫人一日某師の說敎を聞き、深く感ずる所あり、上帝に熱禱して確き信仰を得、傳道の必要を悟れり、是より後亦上帝の能力と企圖とを疑ふ事なかりき、久しからずして傳道の重任に當り、有爲の働きを到る處に爲すが故に諸方より招聘せられしはよく人の知る所なり、嘗て友人の勸告に從ひ、英國に渡航せり、夫人がリヴァープールに達するや優待厚遇せられたり、其時亦諸處より招かれしが始めにランキヤッシヤイアに傳道する事に決せり、此處に止る事一年と數ヶ月、偶ま米國の一婦人印度に航して傳道せんと欲し、夫人に同行を促せるあり、夫人此處に於て思ふ所あり、遂に印度に行けり、其ボムベーに着せしは實に紀元千八百八十年なりとす、此處に亦歡待せられ、諸方の敎會に至り傳道せり、南北印度に亘りてマドラス、ブラマ、ルックナウ等の各地に傳道せり。

スミス夫人の肖像

天意の在る所奇なる哉、夫人は亦印度を去つて亞弗利加に入らんと決せり、此に於て一先づ英國に歸りしかば此處に止つて働かん事を勸められたり、されど亞弗利加に傳道するの急務なるを感じ、遂に千八百八十一年末つ方リヴァープールを解纜して亞弗利加に渡り、傳道上著るしき功績を現はせり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

亞弗利加を退く

長く亞弗利加に在つて傳道せん事夫人の望む所なりしが如何にせん、身躰の衰弱を來し、醫師の告ぐる所に從ひ、直ちに英國に歸航せり、夫人が亞弗利加在留の時土人より一子一女を貰ひ取り、之を教育せんとせり、男兒は夫人の教育により今サウスポルトの學校に在り、夫人嘗て云ひけらく我主此兒の前途を開き、進歩の道を致ふ、其時多望ある哉云々と、六月初旬此兒信徒となつて益々性質を一變せり、夫人之を見て感謝に堪へず、滿腔の謝意を以て常に上帝を讃美すといふ、而して夫人は將來其養兒をして亞弗利加に歸り、暗愚蒙昧の人民に傳道せしめんと希望する由に聞く、夫人は目下米國に於て事業を爲さんと計畫中なりとぞ、思ふに來る十月を期して爲す所あらん。

幽邃清暇

清佐久

天の恵は溢れ來ぬ、余等の靈は救われぬ、神若し潔からば余等も潔からん、其は余等既に子なれば也、余等父の前に小兒たるを得ば既に世の前に成人たるあり、余等父の前に謙遜なるを得ば既に世の前に自尊たるなり、看よガリラヤ海の怒濤一叱の下に鎭まれるあり、看よ塵界のサタン一睨の下に逃去れるあり、主既に勝ち給へり、實に余等も勝ちつゝある也、謡へ凱旋門は前に開けり。

涼しエデンの風吹來りて塵消りぬ、高しシオンの月冴渡りて氣澄みぬ、余等嚢に万物を捨てゝ今は万物を得たり、余等嚢に生命を捧げて今は生命を得たり、余斯世に一文の貸せるなく、余等世に一文の負へるなし、噫余等は自由のもの哉、左れど主はパウロを通して教へ給へり、爾曹凡ての事を人に負ふこと勿れ唯互に愛を負へと、見よクレテのシモンは十字架を負へり。今余等は互に愛を負ふべし。

一度び都城を避けて瀕海の清風に嘯く炎裝紅塵何くにか在る異躰同心高潔の愛に集ふ憂愁無常何くにか在る、優々の神恩畏むも餘りあり、日々夜々昨日も今日も、實に幾其時を經たりける、看よ時は馳せて十有餘日を過しぬ、愛は來りて無限のエターンチーに達しぬ、噫謝すべき哉讃美なし、言葉なし。

小松崎古登女を訪ふ（其三）

生野ふみ

薙刀術練習に要する時日は凡幾年程なりやと問ひたるにもし隔日二時間位宛學びなば全く卒業するは八年の後なりと云れたり。然れ共這は專門に薙刀術を學ぶ時の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事にて單に躰育の爲にするには左る永き間の日子を要せざるは素よりの事なりと。仝女の流にては薙刀術のかたは凡そ七十六本ありてかたの多きと此武甲流に超ゆるものはなかるべしときく。尤其七十六本の中には前申されしくさり鎌をも匕首をも包括し居るを以て主に躰育の爲のみならば此かたを覺ゆる丈にて充分なり別に試合をなさゞるも宜しといはれたり。

是等二三の談話は定めて仝女が得意の談話なるべしとは思へども惜しき事には妹に毫も武術の心得なきものから何事を聞くも只成程そうですかと申すの外他をいふ能はず、談佳境に入るの機會なく十分に仝女の意見を叩くを得ざりしは誠に殘念なりき。其外又、

武道が德育に影響し益ありと思ふは如何に

といひたるに、是も亦其道に入らざれば眞正の武道の德てふものは分らざる由なれ共兎に角日本魂てふものを磨くには是非共武道に據らねばならぬといふ事のみは答へられたり。

要するに仝女は薙刀術專門家なるにも拘はらず一般の女子敎育上に對しては夫々相應なる意見を有せられ居る樣子にておかなかに當世風の人なり。特に其薙刀術を薙刀術として敎ゆるのみにあらず之れを躰育の一法として敎へんといふに至りては他の武術專門家をして評せしむる時はいざ知らず、妹等門外の者にありては誠に宜しき事の樣に思はる。

鎌倉よ洒落る

天知子

淸らけき水、好む、鮮けき空氣、好む、潮の浴み、好む、壯大の濤に碎くる月、好む、颯々去て薪こる鎌倉山に嘯き偶々自他樂あ古跡廻りをなす、無常なる靑草に拂底あ涙をこぼし愍れある石塔に情けないぞやと喞つ、其折〳〵鬱さまぎれにホットつく息氣、結ぼつて凝て而して溶て一の洒落となりぬ今其一二を出放題に任してん、

夏草やつはものどもてふ翁の碑も露けし

夢の跡と讀みし人さへ夢のあと我身もいつか夢となるらん

鍛冶の名人正宗の邸跡木の葉積んで淋けし

露草を抜けば玉散る正宗もあはれこのはゝこぼれ散りける

化粧坂を通りて鏡臺松昔へを知り顔なり

遊びめが朝四暮三の粧化坂いよしえうつす鏡臺の松

海藏寺に源翁和尚の木像いかめし

源翁は石を碎て粉にしてうそで固めて人にくはした

賤の女が戴く桶の底抜けてと子なきを嘆ちたる千代能が底抜け井戸にしかつめらしく向ふて

　くやむなよ無きこそよけれ其桶の底抜け野郎底まば何せん

秋をまたでくずはら〳〵と消る身のと怨みて首を打たれたる右中辨俊基卿が墳墓の葛原岡にくやし涙の洒落は

　ごもつとも思へば我しうらみなるくずはら〳〵の立つ世なりけり

朝比奈切通しの難義な峠にうなりけらく

　朝比奈が力に拔きし山坂は苦や〳〵強地をいかにせんさや

鼻欠地藏道傍に笠もなくてノッペラ坊あり即ち浮かばれ賜へと念じて

　たが背ひしかさ御座らぬに鼻かけの名には地藏の顔もおこらん

覺恩寺の傍より山に登りて大臣山の背の高い山に登りタメキ十王といふ三躰の石佛六七百年の雨に洒れて石骨頑たり北條の守り佛像にて北條滅亡の時三日三夜わめいて申方背の向ふを張たといふもおかし

　高時は歴史にごうな噂したりわめくてまへは雨にさらせり

爲朝勇士八丈島に流さるゝ途中怒て鎌倉に箭を飛ばしたるに止まりし所井戸を穿ちたりといへる箭の根井戸にたまげて

　エライ弓勢も及ばぬタルワブの玉げた井戸を掘りしものかな

白旗山の旗立櫻來て見れば大きやかなる株ばかり、唯一本の若芽辛ふじて相續の木ともならんとす、やよ八幡義家公勿來の關に人は瀬に散ると嘆じませし如くならざれ

　ごもつとも人は瀬に散る山櫻チヤさて若きをころし賜ふな

同行足弱の人々、足を曳いて愚痴をこぼしながら多くの名所古跡を見たがることそおかし

　くたびれし愚痴のかず〳〵こぼしつゝ拾ふにあまる景色名ところ

坂を上り坂を下り石段に飽き矢倉に欠伸す、鎌倉の古跡廻り寺あらずんば墓もに是れ

　みち草やつわものどもの墓まいり

由井が濱の月は白く碎けて怒れる浪に囓みこまれ遠く水天彷彿の間に消へ往く、涼風一陣「我れ」を吹き去て我れ空し、此時我れ最もよかりし

　うたふ松さけびの岩にあく波も
　みな浦風のしらべなりけり

…………

浮世の果は皆小町なり　　芭蕉翁

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

國民之友夏季小說

楠木

撫象子

學海居士、嘗て馬琴の八犬傳を評し、是れ懷古勤王の忠悃より發すと云へり、言の當否は暫らく言はず、居士が馬琴を賞するの眼識大率ね此邊に存す。亦嘗て居士が「細君」「蝴蝶」等を評したる文章を見るに、善惡應報を以て天地間の一大嚴則となし、小說家夢にも之を輕んず可らざることを痛論せり。左れば、居士が一二の小說は、皆主として此の大道を眞向に發輝し、惡人必らず苦しみ、善者必らず賞を受るの趣向を採らざることなし。

此「楠木」は即はち、居士が小說に於ける理想を十分に開陜せしめたるもの也。一篇の骨子、楠氏の忠勇と、善惡應報の理はりとを示すにあり。居士精穿の研究を以て、此の好材料を舊小乘の間より集拾し來り、平素の技倆を殆んど遺憾なき迄に現はさんとしたり。

段落布置照應波瀾の法を得るは、居士が得意とする處ろ也、而して此に於ても亦た申分なし。又文章の雅趣ありて溫强なるは、居士が平素其長所とする所ろなれど、此篇は分きて目立つほどの出來にあらず。其の最も淡泊に書流したる所ろ、必竟無上の推敲を經たる所ろなるべしと云へども、此文を居士が他の作に比べて氣力乏しきやうに思はるゝは、殊に其苦心度を過せしの過ちに由ると云はざるを得ず。時々、轉思發力の筆を用ひ、所ろ〱に、主僕をして他を言はしむるの法は、素と在り來りたる書風なれど、最も面白し、殊に末段

…………と語るに三郞は歎息し　かの光廣正通は何如にしつることと問へば、主の僧は、燈の光をかき起し、光廣は世を去りぬ、正通は今なほ世に在り…………

と云一節、光景眼たりに見が如く、思ず靈妙の筆に感歎せしむ。

一口劍

文章に於ては、露伴の筆尙ほ他に於て發達したり。奇想奇骨に於ては、露伴の特殊尙ほ他に於て煥發したり、たゞ其の神機一轉、懦夫剛丈夫に化し肥滿者瘠勉の人に化するの眞理を現じ、世相を觀ずるの一種秀ずる所ろあり、人性を寫すとの一きわ精彩あるに至りては、露伴の作中他に類少なしと云ふも可なり。故を以て文章奇氣の常よりは寧ろ劣れるは、必らずしも以て深惜すべきにはあらず。

尤憶記

文辭の使ひ方何如にも老熟せり、簡にして野、たとへば茂林の森として繁るが如し。但し神さびたる聖香のあるにもあらず、高尙なる幽深の氣味あるにもあらず、聳然として天を衝くほどの巨木あるにもあらず、只だ一面に枝茂り、スキ間なく草を生じ、一點のアキを見せざるの所ろ賞美すべし、好文章と云ふも可也。

小說「浮世」を讀む

撫象子

浮世の著者は、固より其自傳を物したるにはあらじ、われは著者の言ふ所ろを信ぜんと欲す。左れど世に在ふれたる戲作者の如く、只だ思はぬとを捏造して筆を弄そびたるものにあらじ、確かに其心中經驗の感想を寫したるものあるべし、然らずば斯く人を欺かす迄に巧みに人情を製造するは必らずや難し。初段、幼なくして母を失ひ、少くして小學校に通ふの條り、歷々凄凉、讀むものをして夢にも小說なりとは思はざらしむ、之れ其の想像の切にし至れるに由るとは云へども、全篇の趣向を主人死に臨んで一宵一宵其腹臆する所ろを寫すの躰に托し、讀者に一きわの同情を表せしむるの巧手段、亦與かつて大に力ありと云ふべし。中ごろに至り、少しく筆力の衰へたるを覺へたるが、末段、榮光を認めて万景一變し、憂れひは世に存せずして我に存するとの理わりを顯揚し、殆んど遺す所ろなし、此段ありて全篇の暗黑乍ち曉と破れ、年老再び年少に復して、天の幼兒となり、村雲も、雷も、嵐も、な齊發天朗々の導びきとはあれり。それ近頃の小說に於て、感想の如此く健全、理想の如此く淸麗なるものを見ず、世人其美を悟ること少なき歟、われは世の爲めに此眞理の現はれざるを歎ぜずんばあらず。

代議士の妻君東京の婦人改革者

と題し、去十二日の國民新聞は云く。今や代議士貴族的の竈窟たる東京に入り來る。其選れたるもの亦宜しく作随し來るべし、夫を監視する耳ならず、自家の智見を廣め夫を慰さめ且つ其想を維持し、尙ほ都會に平民主義の空氣を吹入る。而して此新來の婦人を歡迎し、之をして部門の毒氣に染ましめざるは、府下にありて一頭地を拔くの婦人改革者が任也。

女教員を論ず

教育報知に其題を見る、たゞ序論にして主意を知らず、左れど女教員を可させぬの時機あり、次號出るに及んで一評すべし。

女學生の洋行

八月十五日の基督敎新聞に此の記說あり、ウイルソン大學に於ける塚本ふじ子、ウエルスリー大學に於ける松江たづ子、マウントホリーヨークに於けるギユーリキ宮川さし子、カールトン大學に於ける渡邊つれ子、及び來年ウエルスリー大學に趣かるべき増田つる子等の事を擧げ前途に對し望を述べたり。

小説

小公子

第一回（上）

若松しづ子

セドリツクには誰も云ふて聞せる人が有ませんかつたから、何も知らないでゐたのでした。おとつさんは、イギリス人だつたと云ふ丈は、おつかさんに聞ゐて、知つてゐましたが、おとつさんの歿したのは、極く少さいうちでしたから、よく記臆して居ませんで、たゞ大きな人で、眼が淺黄色で、頬髯が長くつて、時々肩へ乘せて坐敷中を連れ廻られたとの面白かつたと丈しか、ハツキリとは記臆てゐませんかつた。おとつさんがおなくなりなさつてからは、おつかさんに餘りおとつさんのとを云ぬ方が好と云とは子供ごゝろにも分りました。おとつさんの御病氣の時、セドリツクは他處へ遣られてゐて、歸つて來た時には、モウ何も彼もおしまいになつてゐて、大層お煩なすつたおつかさんも漸く窓の側の椅子に起き直つて入つしやる頃でしたが、其時おつかさんのお顔はまだ青ざめてゐて、奇麗なお顔の笑顔がスツカリなくなつて、お眼は大きく、悲しそうで、そしておめしは眞ッ黒な喪服でした。

かあさま、とうさまはモウよくなつて?。

と、セドリツクが云ましたら、つかまつたおつかさんの腕が震へましたから、チヾレ髮の頭を擧げて、おつかさんのお顔を見ると、何だか泣度樣な心持がして來升た、それからまた、

かあさま、おとうさまはモウよくおなんなすつたの?。

と同じとを云つて見ると、どういふ譯か、急におつかさんの頸に兩手を廻して、幾度も〳〵キスをして、そしておつかさんの頰に、自分の軟かなお頰を推當て上なければ、ならなくなり升たから、その通りして上ると、おつかさんが、モウ〳〵決して離ないといふ樣に、シツカリセドリツクをつかまへて、セドリツクの肩に自分の顔を推當て、聲を吝まずにお泣なさい升た。

ソウだよ、モウよくお成りなすつたよ、モウスツ……スツカリよくおなりなのだよ、ダガチ、おまへとわたしは、モウふたり切になつてしまつたのだよ、ふたり切で、モウ外に何人もいないのだよ。

と曇り聲に云れて、セドリツクは幼な心の中に、アノ大きな、立派な、年若なおとつさんは、モウお歸りなさるとがないのだといふとが、合點が行ました。他のとでよく聞く通り、おとつさんはお死になすつたのだろうと分りはしたもの丶、どふ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

いふ不思議な譯で、こふ悲歎有樣になつたのか、ハツキリと會得が出來ませんかつた、自分がおとつさんのことを云ひ出せば、おつかさんはいつもお泣なさるから、コレハ餘り度々云ないはうが好いのだろう、いふまゐと內々心に定めて、そうして、暖室爐のまへや、窓の側に、チット默つて坐つて入つしやる樣な時には、打遊つて居てはいけないといふとも分りました。おつかさんと自分の知人といふは、極く僅かなので、人に云せれば大層淋敷生涯を送てゐたのですが、セドリツクは、少し大きくなつて、なぜ人が尋ねて來ないといふ譯が分る迄は、淋敷とも知りませんかつた。大きくなつてから、おつかさんは孤子で、おとつさんがお嫁にお貰なさるまでは、此廣い世界にタツタ一人で、身寄も何もなかつたのだと始めて知りました。おつかさんは、大層な御器量好しで其時分ある金持の婦人の介抱になつて入つした處が、其婦人といふが意地悪な人で、ある日のこと、カプテン、エロルといつて、後にセドリツクのおとつさんになつた人が、丁度その家へ來合せてゐた時、何かとがあつた末、おつかさんが睫毛に露を持たせながら、急いで二階へお上りなさる處を、其お方が御覽なすつて、可愛らしく、あどけなく、萎れかへつた其姿を忘れるとが出來ず、色々不思議なことが有て、互に心を知合ひ、愛し合つて、とう／＼婚姻をなさる樣になつたのでした。さて此婚姻に付ては、さま／＼の人にわるく思われたのでしたが、其中で、一番に腹をたてたのはカプテン、エロルの爺さまで、是は英國に住んでゐて、お金の澤山ある豪儀な華族さまでしたが、癇癖持て、アメリカとアメリカ人が大のお嫌でした。此方は、カプテン、エロルの上に、二人の息子をお持でしたが、英國の法律て、家に屬する爵位も財産も、何も彼も、皆長男が受繼て、若し長男が死ねば、次男が跡を讓り受るとに諚つて居り升たから、此お方は大家に生れはしたものゝ、三男のとて、ひどく有福になる見込はありませんかつた。然るに、カプテン、エロルは、二人の兄たちの生れ付ぬ天才美質を備て居升た、美麗なる其容貌、倔強なる其姿、生々したる其笑、華やかなる、其音聲其大膽で、慈悲深きと、人に接て柔順なる擧動は、多くの者の敬愛を一身に集ました。さて二人の兄は、是に反して外貌も美しくなく、何の才も持ず、心に美質を備ても居ませんかつた故、イ、トンなる邸內に在ても人に悦ばれず、大學に修學する折も、學問は大嫌て、其處に居間只時日を無益に消費する計で、朋友もろくに出來ませんかつた。父なる侯爵殿は此二人の息子

には非常に失望し、失望のみならず常々大層迷惑の躰でした。自身の世を讓る嫡子は先祖の家名に光澤を添へぬ耳か、男らしく、凛然敷性質は一も備へず、只自身の慾を恣まゝにし、つかひ拂ふことを知つてゐる計りで、世に何の益なき人物でした。然るに産も位もなかるべき末子が、他の二人に欠て居る伎倆も、德も、美貌も、兼備へて居るとは、此人にとつて如何にも殘念千万のことゞもでした。時としては巍々たる其位爵、壯麗なる産業に附屬す可き美質をば、他に與へずして獨り占したる此若年が、反つて父の心には憎くなりました。併しまた傲慢頑固なる其心の底には、此末子を大に寵愛せずに居られず、二つの情は互ひに戰つて居ましたが、或る時此忌々しさが癇癪となつてムカ〳〵と、外に發し俄かに三男を米國へ旅行に遣はしました。是は二人の放蕩不頼な息子の擧動に困じ果て、末子に比較しては腹を立てるから、末子を暫く遠ざけて見よふと思付たからでした。然るに六月たゝぬ内にはや淋しさを感じ始めまして、密かに末子の顔が見たくあり、直ぐ文通して歸國を命じました。其手紙と引違つて着したカプテン、エロールの書狀に米國で出逢ふたある妙齢の婦人のことゝ是と婚姻する決心をしたことが書て有ました、侯爵殿が此手紙を讀まれた時は夫こそ立腹でした。生來癇癪持では有升たが、此時程其癇癪をひどく起したことは無い位ひでしたから手紙の來た時丁度居合せた給事が其時の様子を見て御前はヒヨツト卒中でもお發しはあさらぬかと心配した程でした。凡そ一時間も猛虎の如くに哮り立ち、其あげくに、一通の端書をカプテン、エロルに認め遣はし、以後邸に近寄ることは一切ならぬ、又親兄弟にも文通を禁ずる、今後如何様なる暮しを爲すとも何處に果てやうとも、一向かまはぬ、ドリンコウトの家よりは永遠に切離したものと見做して、父の存命中は、何の補助もせぬものと心得よ、と申送りました。カプテン、エロルは此手紙を一讀して愁歎に堪ませんかつた。此人は故郷も懷かしく、自身の生れた美麗な家も至つて戀しく、癇癪ある老父にも親しんで居つて、是まで父が色々失望したことを氣の毒におもふて居りましたが、此文通があつてからは最早親子の間に何の好みもあいといふことを泣々覺悟致しました。始はどうしよふかと方向に迷ひ升た。是迄の育ちが育でしたから働て活計を立ることには慣ず、事務上の經驗も有ませんかつたが、併し勇氣も決斷力も充分でしたから先陸軍士官の株を賣却してしまい、様々の困丹の末漸くニユーヨウクの都會で、勤め先を見つけ、間もなく婚姻を致し升た。偖大英國某侯爵家の若殿とも云れる身分

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

が、斯く落ぶれての生計は昔しに比らべて非常な懸隔でしたが、併しまだ年は若く、世の中の面白みも多いのでしたから、勉勵せば何事か成らざらんと、頻りに前途を樂しんで居り升た。住居といふは物靜かな町のちんまりした家で、そこで男子が一人生れてからは質素ながら物事總べて珍らしく、愉快でしたから、只餘りの愛らしさに思ず思を寄せ、其人にも愛されて人の介添といふ身分のものを妻にしたのを後悔したとはたゞの一度もありませんかつた。此婦人といふは、如何にも愛らしい人物でしたから、生れた男子も兩親によく似て居りまして、此通り偏卑な安つぽい家居に生れたには似ず、其果報は誰にも劣らぬほどでした。第一、此子は、いつも壯健でしたから誰にも面倒を掛ませんかつた。第二に氣立が柔和で誠に可愛らしい子でしたから、人毎に嬉しがられました。第三に器量の好いとは斯に對た樣で、頭には赤子によくある禿の樣なもの少しもなく、生れた時から軟かくつて細い金色の髮が澤山で、六ヶ月たつ中にくる／＼と可愛らしくちゞれました、眼は大きく茶色の方で、睫毛は長く、顔は極く愛嬌ある質でした、筋骨は珍しく逞しい方で、八ヶ月たつと、急に歩く樣になり升た。其上大層人なつこくゝ小さい手車に乘つて、市街を運動して居る時分、誰でも近寄つてあやす者があれば、例の茶勝な眼で、チットまじめに見つめるかと思ふと、直ぐ可愛らしく笑ひかけて、雜作もなくお近付になつてしまいました。此通りゆえ、此物靜な町の中で、此子を見て、あやすのを樂しみにせぬものとては、一人もなく、向ふ角の萬屋の亭主で、世に偏執持とはあの人と云はれる位の人まで、此子には眼がないのでした。

寄書

咄、此不德狡兒

巴水野人

女學記者嚴本君足下、足下の多能なる野人が喋々を俟たずして既に見聞せられたるならん十九世紀の教育を受けつゝある新日本の青年にして往々奸惡狡猾なる醜梨を爲し自他の名譽を毀損する不德狡兒あることを然れども此に野人が述べんとする程の極狡極惡なる醜聞は未だ耳にせられたることなかるべし那願る女學校―殊に基督教主義の女學校―の體面に關す敢て禿筆を顧みるに遑なく一言を述べて之を女學の代表者たる足下に訴へ併せて貴誌の紹介に依て此不德狡兒輩を警戒せんと欲するなり請ふ足下幸に野人が以下陳述する處に一顧の榮を賜はらんことを頃日一友と會す談すると或物共に慨然歎して侍るとあり今其大要を摘載せば如左

某生某家(共に氏名は明瞭なるも殊に之を明言せず)に寄たり婢に通じて孕む事發はれて某家を放逐せらる某生頗る其處置方向に困ず事實を密にして(即ち婢に通したる事を明かにして)他に之れを謀らんか擯斥を免くるの恐れあり如かず事を構造して巧に之れを粧はんにはと漸くにして一事を案出す即ち人に語て曰く生某女學校(某督教主義の女學校にして某生が指定したる校名は明かなれども素より無實の構造に係るものなれば此に之を明言するに忍びず)の學生と交ること年餘不德互に……遂に其女學生をして懷胎せしむるに至る云々と語り了て恬然たり野人之を聞て慨然たり思ふに此に類する青年又少々にあらざるべし男兒なりと誇稱する價値何くにあるか才子なりと自贊する運動何くに在るか德義の腐敗も此に至りて又極れりと云ふべし夫れ過ちを知て悛むるに吝ならざる

者野人は之を稱して眞男兒なり眞才子なりと云ふ而て斯る青年が日本國に多々益々多からんことを希望して止ざるなり咄々汝不德狡兒よ汝は言ふも忌はしき極穢極汚の大惡事を犯しながら之を悛むることを爲さゞるのみならず却て之を隱蔽せんと欲し無邪無根の事柄を捏造し賢婦淑女を養成する女學校――殊に至潔至高なる基督敎主義の女學校――の名譽を毀損したり其行跡其心情の悪むべき譬ふるに物なきなりさなきだに日本女學生の一進一退は社會の注目する處となり褒貶頻りなるに汝如き狡漢ありて罪なき女學校女學生に無實の濡衣を被らせたり女學校の迷惑は果して幾何許りなるぞ女學生の愁傷は果して幾何許りなるぞ野人之を推想して眞に氣の毒に堪へざるなり女學の代表者たる巖本君足下は以て如何なる感覺を起さるゝ乎野人は日本青年の一員として正義の光明輝かん限りは筆頭舌端勇を鼓して之を罸誅せずんば措かざらんと欲するなり。

希くは足下の椽大なる卓筆を揮つて充分に此等不德狡兒輩を懲戒膺懲せられんことを嗚呼、汝不德狡兒よ幸に女學記者の示する處を聞て三省猛顧せよ。

述懷

嘯月子

梓弓

武士の

一筋に

いさをしを

ふしてなを

およびなき

くらゐ山

とゝせまり

秋風に

めくらせは

しらぬひの

波たかく

はづかしく

ひたすらに

いさふるは

山の奥

瀧津瀬の

さりつたへたる

やたけ心の

いまひときはの

おきてや思ひ

思へどいかに

聲のあなたの

みるよしもなく

八とせもたちし

つくづく思ひ

我身の程を

つくしの海の

迷ひし事の

今より后は

世の遊き事を

あらで心を

清くすゞしき

あたりにさめて

月と花

やすらかに

やせの鳳

ながくつたへん

花にめでつゝ

吹つたへての

八百萬代も

返歌

みれ子

子よ孫よおのれひさりをつゝしみて

たることを知れ身の程をしれ

文範

●内田二十一居士様　御信切の勸告を謝す、居士が言至極理あり、一層服膺仕るべく候（女學雜誌記者）。

●柳川にて陜陜生　文章を學ぶには讀むのと書くのとは何れも必要であつて何れが大切であるか分りません、私は何れも同樣に必要事と存じます、何故なれば何程書く事を學ばんとしてもよく讀むで文字を知らなければ書けません、亦如何程多く讀むでも書く事を勉めなければ少しも活用しなくなります、夫れ故讀むと同時に書くのが最も宜しいのです、○何程位作らば縱横自由に筆を運ぶ事ができるかは此處で何とも申上る事はできません、人の學力と才能と敎育等の如何によつて異ります、如何なる書物が最も文章を作る爲めになるべきか是も人によつて異りましよふ、現に角自ら面白いと感ずる書物が最も爲めになります、然し餘り文章の拙なるものでは益にありません、今日我國に行はるゝ文體にて書かんとすれば漢學も和學も多少勉強するのが必要です、何程位勉強して宜しいかは亦人の才能如何によつて異ります文體は矢張り普通に行はるゝ假名交り文が宜しかろうと思ひます近時の文體と云へば格別添削をする人はありません漢學者か和學者の外にはありません少し名高い人に依頼して添削を乞ふのも宜ひでしよふ○詩歌を學ぶのは始めには矢張り敎師を撰んで直接敎授を乞ふの外よき方法はありますまい、詩と歌とは文章と異り殊によき敎師を撰ばなければなりません、始めに誤へば一生涯よき作はでません

●房州にて黑面女史様　海水浴をして黑くなりしを直す方法はよく知りません然し過日新聞紙の廣告に銀座にて發賣する所のものが海水浴をしても日にやけぬ妙藥であると書ひてありました、實際はよく知りません

●京都市の御一人　明治五年の舊の二月二十八日及び明治七年の舊二月二十八日は新暦の何月何日ですか、古るい暦を失ひまして分りません、何處かの老人に暦を借りて御覧になればよく分りましよふ

時事

○國學院

新聞紙上近頃ろ巨大なる廣告を見る、是れ國學院設立の吹聽なり、くど〱小說の跡に短き俳諧出で、六かしき漢文と面倒なる反譯文との跡に國文を呼起す、一隆一衰皆な時の運なるべし。

○保姆撿定法

幼稚園保姆の撿定に就きては未だ一定の方法あらざりしが、近來幼稚園の設け各所にあり、隨て保姆の需求少からぬ今日に於て、完全の保姆を養成する方法なきは普通教育上の欠點なりとて、此の程竹澤さと氏、外五名より保姆撿定試驗科目を設置ありたき旨を府廳に建議せりと云ふ。

○メキシコ移住策

日本國の領地を擴むるにも、日本國勢に大なる權力を容るゝにも、日本の農業を一大變するにも、移住策を行ふより急且つ多益なるは無し、但だ其移住地と移住方法とに付きて頗ぶる深考熟慮を要するものある也。此頃ろ榎本子爵が內閣へ呈出したるメキシコ移住民の案書なるものを見るに、熱心のほど何如にも感服の至りなれど穿鑿研究の向は不十分なるもの多し、希はくは一層の好準備を經て、いよ〱見込あるの曉には果然大移住を奨勵せんとを欲す。實に今日は日本國の運命を大仕掛に決案するの時なり、權宜上策略上の政治競爭に局促すべき時にあらず。

○支那、大鐵道を布んとす

近來支那國の評判漸次に高くなり、巨人熟睡の夢より徐々として覺め來らんとす。此度いよ〱大鐵道布設の事を斷決し、最低利の銀二千万兩を歐州大陸の財本家より募り、尙ほ國內十八省の有志家より夫々資金を募集し、今后十五年乃至二十年を期して布設落成の見込なりと云ふ。

○富岡製糸場

いよ〱賣下げの評議に決せしよし、左れど二十五万圓內外の價ひと云へば、目下容易く應ずるものなし。元來新製糸法の摸範にとて造られしものゆへ、之れを民間有利の仕事に用ひんとすれば、損斗りなるべし。幾千百の工女が職業を失ふは悲しきやうなれども、斯る日本現時に不適當なる大製糸法は覺へたりとも箇々に益うすし。望み手なくして製糸場に鼠蕃殖せんとするも、勢ひ止むを得ざる也。

○全世界繭生産高

西暦千八百八十五年		九〇〇、二〇〇〇キログラム
同	六年	一〇五五、四〇〇〇
同	七年	一一八八、八〇〇〇
同	八年	一一五四、八〇〇〇
同	九年	一一七〇、六〇〇〇

右の如く年々に增加の向きなり、之は日本支那等の産額が增加するにはあらで、外國にて追々養蠶に着手するゆへ也。

○米國に於ける墮落せる同胞

出稼と稱し、外國にまで我國の恥をさらす、不德不埒なる墮落婦人は、いよ〱多く米國サンフランシスコに群がるよし、在桑港の婦人矯風會員川口ますへ女史、近頃ろ書を會頭に寄せて大ひに之を歎けり、中に云く

(中略)三ヶ年以前私當地に參候節は在留の日本婦人は僅々十餘名に過ず其內數會等にて出會候人々は七八名にて御坐候ひしが其后日本婦人の追々增加いたし候事を承わり候得共何に趣き候哉頓と不相分色々問合候得ば云に忍ざる職業に從事いたし候姉妹の多よし右に就不及ながら同志の姉妹吳山藤井兩夫人などの御盡力もありて慈善會なるを設新に渡港の婦人の爲に盡力いたしあしき道に陷らざるやう勉居候處兩夫人も布哇及ひニューヨークなどへ出發いたされ殘る私共の手一つにしては微力にして及難き事と種々心配いたし居候所図てる姉及男子諸君の賛成せらるゝありて運動いたし着船ごとに早速駈けつけ渡航の目的將來の生計方など相尋候得共十中六七までは曖昧の内にありて或は昨日教會慈善會などにて再會を約しながら翌日に至はもはや何か影をかくし出沒不思議の職業に陷り候者多く誠に慨歎のいたりに御坐候既に當地に着しなば恰も無政府のごとき自由の地なれば隨分惡漢も多く加るに私共の一身を委頼すべき方に面會盡力を願ひ候得共無情にして更に感じたる所もなき事と相見へ其答に追々人員の增加するに隨ひかくの如き者の現れ出るは免れがたき數なりと本分の責任あるにも拘らず殆んと傍觀のありさまにて「嗚呼」と歎するの外無之候私共常に全能の神に願處は布哇國にありて我等の爲に尤も御盡力被下候安藤御夫婦の如人の當地にあらばやと熱望するの外無罷の姉妹のこゝに露れんことを祈望いたし居候。

我政府一層、取締を嚴そかに爲さずんば、國辱いよ〱大ならん、在京の婦人矯風會員は近日之が爲めに政府當路の人に建議する所あらんとすと云ふ。

○米國の高等女學生

パル、マル、アゼット新聞は云へり、今年は婦人世界大紀念の年なりと。蓋し大學の試驗に於て最優等の合格者大抵女學生なりしとを謂ふなり。即はちフォウセット女史の事は既に前號に記載したるが、其の他種々の學科に於て、ケムブリッヂ大

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

學の高等試驗に及第したる最優等者には、皆な女學生の名を存せざるとなし、其姓名左の如し、

物理學最優等生甲の部

E. Dale.	ギルトン女大學出身
H. M. Martin.	ニウハム女大學出身
M. C. Tebb.	ギルトン女大學出身

同乙の部

L. Martin-leake.	ギルトン女大學出身
M. O. Mitchell.	ニウハム女大學出身

歴史學最優等生

H. Stevenson.	ギルトン女大學出身

右女史に匹敵して同等に立ち得たる男學生一名ありき。

古典學最優等生

M. Alfred.	ギルトン女大學出身

右女子に匹敵して同等に立ち得たる男學生三名ありき。

數學最優等生

P. C. Faucett.	ニウハム女大學出身

右のホーセット女史は即はち競爭者中の第一等にして最優等者中の最優者たりし也。

F. A. Field.	ギルトン女大學出身
最優等生中第二十一番席	
M. Led.	ギルトン女大學出身
最優等生中第二十七番席	

○フホーセット孃紀念學資

前に記せる如く、女秀才濟々として出で、女學尤とも進歩したる英國の人民なも倚更に喫驚せしめたるほどなるが、中に就きてフホーセット女史の名譽は倫を絶せるに至る。そは物理學に於ては二年前アルフレッド孃（前に記せるアルフレッド女史の姉）すでに最優等生となり、又古典學に於ては、ラムセー孃が前年非常の成績を以て最優等生となりし程にて、前方多少の例しあるとなれども、數學は女子に適せざるものとして此學科こそ到底男子と並び立つと能うまじきものと人皆な信じ居りたるの際、學問全世界に秀づるの大英國に於て、而も其大學中の大學とも云ふべきケムブリッヂ大學の高等試驗に於て、多くの優等生中更に秀拔して其最優等生となりたるもの即はち女學生なりと云ふの故を以て、フホーセット女史此度の成功は殆んど全英を聳動するに至りぬ。此を以て、パル、マル、ブセット新聞に投書し、女史が偉績を紀念せん爲め、フホーセット女史紀念學資とも云ふべきものを募集せんとを企だて之を廣告したる學士あり、其案として建議したる三つの方は左の如し、

一。此の喜ぶべき成功を祝せん爲め有志者より各自義捐し一千五百弗に達するを待ちて〆切り、其利子を以て、今後ニウハム女大學中の秀生に學資を給與するとを爲す事、但し其秀生を定るの權は、同女大學の委員とフホーセット女史とに一任する事。

二。もしくは又た、ニウハム女大學の實驗室余り宏大にてもあらぬゆへ、此際紀念の爲め之を擴張する事。其方此度女史の成功をきくや否や、著名の辨士ガルランツクス氏が其藏書を寄附せし如く、諸有志者より其機械若干卷づつを同女大學へ寄附する事。

三。もしくは又た、ケムブリッヂ大學の男教員及男學生同意贊成して、今後は女學生にも男子同樣の學位を授くるとに改むべき事、蓋し學力試驗に於て女子すでに男子を拔きて卓越したるに、學位は古來の慣習により之に與へぬと云ふは、眞に笑止千万なるが故也と。

然るに、此廣告に對し、すでに續々義捐する人あり、此分にては第一の方法の如くいよ〳〵實行せらるゝならん。

○高等女學生健全なりや

右の如く女學生の學問の大に上達するは賀すべきなれど、之が爲め其健全を失ない、病弱となるとは無きやと、人往々掛念するとあり。ヘンリー、シヂウイック夫人は、其實際を試驗せん爲め、ケムブリッヂ、チックスホルド兩大學にある女學生と、同じ年配の女子にて此大學の近傍にて尋常の仕事を爲し居る婦人とを比較して、其健全何如を調査したるに、大學中の女學生の方反つて壯健なるとを確認したる由、近着のインデペンデントに見ゆ。

○印度の斷髮師

四百人此頃ろ、ボムベーの都に相會し、パ、ウイ、モアなる人發議して申しけるは、彼の年若き寡婦（六才七才のヤモメあり）の頭を剪るは何如にも慘酷なり、近來吾等が職業の大に衰ろへ行ける或は天罰なるやも計られず、我印度の經典には斯るとを爲すを明らかに禁するためしもあるに、我等は今後決して其過ちを再たびすべからず、今後相盟つて寡婦の頭らを剃らじと皆ひ出したり。皆一同賛成して斯く決議したる由。今や、ラマバイ、ライダーの兩女史並にダイヤー氏等の盡力により、彼の慘酷なるヤモメの制度少しづゝ破れ來り、最には堂々ヤモメを再娶したるものすらあるに、今又不思儀の由緣によつて此出來事あり、天竺の憐れなる女子亦やうやく日光に近づきつゝ來る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通信

●江州長濱通信

女子教育

は小學の制あるのみ他に高等教育を受くるの道なし當地より各地の女學校に入りしものは通信者の聞く所によれば嘗て京都同志社女學校を卒業し現に同校の教授をなしなる人の外に之なきよし。

長濱小學

二十二名の教員中訓導四名授業生六名の女性ありて專ら女生徒を分擔教育せるは實に喜ぶべきことゝいふべし只願くは更に進で小學教育を女性に一任するの好模範を世に公示せんことを。

童謠

通信者が長く京坂の地に滯在せる中三々五々相合する童子が口にするものを聞くに單歌にあらざれば唱歌にして聞くものをして溫風の末頼母敷を感ぜしめしが當地に於ては童謠多くは俗調醜歌聞くものをして赤面せしむるが如きあり軟和なる腦中已に此汚點を印せしか嘆じ兒童教育普及の遲きを感ましめたり當に當局者の注意すべきことにこそ故に目下の最大急務は

幼稚園の設立なり

人間の尤も感化し易き初代の教育は一に此園にあり然るに當地未だ此設立なきを遺憾とす故に通信者は方に發起者となり有志者の門を敲き相計て一の私立幼稚園を設立し秩序あり主義ある保姆の手に托せんとの考案なり。

婦人散髮師

女學雜誌昨年中女性散髮師の件ありしが當地にも現に一人の之に從事するものありて手並頗る巧なり。

●**無職業の信者諸姉に告ぐ** と廣告しカード製造の爲め十余名の女職工を募る旨公會月報第一號に見ゆ。

●**婦人衞生會の慈善** 加藤帝國大學總長の夫人を會長とし貴婦人令孃の組織したる婦人衞生會にては府下虎列剌患者も日に增加し病院に入るもの多くあれば本所區病院へ雇はれ居る看病婦十六名へ胸當二枚づゝ贈與する由なり。

●**横濱英和女學校** 山手六十七番にありて是迄甚だ微々たるものにして教授法は無論寄宿舍も固より不完全なるものにして學校と言はんよりは寧ろ小なる塾舍と謂ふべきものなりしが斯くては可惜良果を結ぶべき苗も風なきに枯らす道理なりと主管ミツスブラオン自ら米國に歸りて資金を募集せしに忽にして數万の多額に上りたれば愈々完全なる一大女學校を創立せんとて目下其地を撰擇中なり尙は日本人男女の教師を聘せんとて已に其周施方を或人に依賴したりと。

●**福井婦人會** 福井縣福井市に婦人會合の團躰あり福井婦人會と云ふ婦德を高尙にするを目的とし傍ら家庭教育家事經濟或は衞生の一斑を各專門家を聘し講義せしめ同會員は會合其講義を聞く尤も會合は毎月一回なり目下會員は概數百名ありと云ふ安立縣知事季家本部爾書記官の夫人其他朝野紳士の夫人令孃等皆其會員なり

●**伊豫今治通信** 去る二十九日午後六時より今治會堂に於て當夏休暇中歸省せられたる十一女學校生合併大親睦會を開きたり其の校名は東京明治女學校、西京同志社女學校、大坂梅花女學校、同照暗女學校、神戸英和女學校、岡山女學校、松山女學校、神戸婦人傳道學校、熊本女學校、今治婦人夜學校にして教員生徒客員合して百二十名なりし、柳瀨シカ姉司會者となり同姉の祈禱を以て始め、山中ユキ姉（今治婦人夜學校）開會の主意を陳べ、次で各學校の近況を報告したる人々は重松チカへ（同志社女學校）增田タメ（神戸婦人傳道學校）竹村カズ（松山女學校）村山トシ（神戸女學校）中谷ユキへ（岡山女學校）增田シヅ（熊本女學校）の諸姉あり其間々に各女學生の唱歌奏樂ありき終て茶菓の饗應あり且つ餘興には種々の遊戲等もあり中々の盛會なりし、近來女學衰頽の氣味あるを慨嘆し諸姉の精神ある演說感話は滿場の姉妹をして奮起せしむるに足り又其の熟練妙巧なる音樂は滿場の人々をして舞蹈せしむるの思あらしめたり。

●**片山たみ女史** 去十九日轉症コレラ病にて死す。

●**英國二大學新に女門を開く** ケインヅルなるキングス、カーレーヂ及びチックスフホルド大學の二つは此度び女子を男子同樣に教授することとなれり。

●**女子体操** スエーデンの体操教授場に於て、此度五人の米女子卒業したり、之を米國女子スエーデンの同校に於ける卒業の最始とす。

●**縫針慈善會** 米國のニードルチイク、ガイルドと云ふ題名の如き婦人の慈善會は、着物の破れ、切れ、などを綴りて貧民に與ふるの會なるが、昨年中には凡そ二十万枚を種々の所へ寄附したる由。

●**神智協會の會頭** 印度セーロン島なる神智協會々頭オルゴット氏は此程其任を辭しブラヷツトスキー女史之に次ぎ會頭となりたる由。

廢娼記事

●久留米

今日に當り尙ほかゝる事あらんとせしは歎くべきことかな即はち此頃ろ久留米に於て近來貸坐敷設置論起り旣に去る十六日久留米市會に於て一問題となり甲は設置すと云ひ乙は不可と云ひ議論隨分甚たしかりしと然し市會議長三谷有信氏は否論なるも元來町家の主なる者は置娼論多く頗る困難なる問題なり然れども此際久留米一致教會員は奮て不可論を主張し働き居る也。

週報

○官令 本週法律第六十三、六十四、六十五、六十六、六十七號及勅令第百六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四七十五、七十六、七十七、七十八號等を裁可公布せらる

○政治 十二日內閣會議に山縣、山田、後藤、陸奥の四大臣參集せり●十五日內閣會議に山縣、山田、西鄕、青木、松方、後藤、芳川、陸奥の各大臣登閣せり

○銀行 十六日日本銀行は定式總會を開けり

○教育 關西教育協會は去る十一日大坂に於て開かる

○叢報 十三日從三位宗義和薨す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第十二卷總目錄

自二百〇一號至二百廿五號

社説

- 貪獸歎 …… 一
- 幾多の非廢娼論 …… 三
- 同 …… 三一
- 今日の女子、政黨に入る可らず …… 二九
- ウィラード、レビット、アッケルマンの三女史 …… 五九
- 閨秀大詩人 …… 六一
- 政治上の道德 …… 八七
- 改革者となる乎、隨從者となる乎 …… 一一五
- 君子は器ならず …… 一四五
- 廢妾論、廢藝妓論 …… 一四六
- 明治女學校生徒に告ぐ、目下の女子教育法 …… 一七五
- 先生論 …… 二〇三
- 女子と獨立 …… 二〇五
- 二種の青年を見る …… 二〇七
- 安息日 …… 二三一
- 風流を論ず …… 二五九
- 男女青年論 …… 二八七
- 同 …… 三一五
- 同 …… 三四三
- 哲理人情 …… 二九〇
- 教育者、信徒、廢娼論者に告ぐ …… 三七三
- 今の德育主義 …… 三七六
- 天下を讓らん …… 三七七
- 地久節 …… 四〇三
- 何ぞ貧民を救濟せざる …… 四三三
- 貧民救濟の方法 …… 四六三
- 議員熱望者の熱度を冷す …… 四六一
- 政治社界の君子大丈夫 …… 四九一
- 多數女學校目下の欠點（上） …… 四九三
- 同（中） …… 五二〇
- 同（下） …… 五四八
- 以後三日間、婦人の勢力 …… 五一九
- 國は猶ほ家の如し …… 五四七
- 歸る人、迎ふる人 …… 五七七
- 詩仙（上） …… 五七八
- 同（中） …… 六〇七
- 同（下） …… 六三六
- 女塾別舍主義 …… 六〇五
- 事業論 …… 六三三
- 細君内助の辨（上） …… 六六一
- 同（中） …… 六九一
- 女子の政談傍聽 …… 六八九

論説

- 文學は男子の天職に非ず …… 七
- 「つぼみ」雜誌を讀みて感を記す …… 三六
- 當時の壯士 …… 六四
- 時勢に感あり …… 六五
- 日本に於ける婦人問題 …… 九一
- 同 …… 一二二
- 聖書は女子撰擧權を許さゞるか …… 九四
- ベルツ氏の存娼論を駁し且つ廢娼論に付き一言す（一） …… 一一九
- 同（二） …… 一五〇
- 女子何ぞ和歌を學ばざる …… 一五五
- 同（其二） …… 一八三
- センチス、ミルラー夫人の改良服 …… 一八一
- 同 …… 二一一
- 廢娼の精神及其順序 …… 二四〇
- 同 …… 二六五
- 詩人と田舍の風景 …… 二六三
- 家政學は女子教育の要素なり …… 二九三
- 日本文學の統一 …… 三二〇
- 色このめく …… 三四七
- 女子簿記を學ぶの必要 …… 三七八
- 同（其二） …… 四三七
- 狂歌の粹 …… 三八〇
- 女子と速記術とに就きて思ひ當りたることの一二 …… 四〇七
- 賣奴の弊風再燃せんとするを防ぐべし …… 四三八
- 同 …… 四七〇
- 同 …… 四九八
- 同 …… 五二七
- 淨瑠璃節及び其著作（上） …… 四六八
- 同（下） …… 四九六
- 島田三郎氏の演說 …… 五〇〇
- 猜嫌に就て …… 五二三
- 讀書論 …… 五五三
- 在布哇受洗の始末（上） …… 五八三
- 同（中） …… 六一一
- 同（下） …… 六四一
- 慈善事業に對する婦人の心得 …… 五八六
- 同（其二） …… 六一三
- 女子教育の私見を述べて巖本兄に寄す …… 六六六
- 女子に撰擧權を與ふべし …… 六九四

批評

- ベルツ氏女子教育上の弊害 …… 一〇
- 琉球淨瑠璃 …… 一一
- つぼみ …… 一一
- 万國娼妓沿革 …… 一一
- 女子參政權の辨難を評す …… 三九
- 毛糸編物教授本 …… 四一
- 帝國議會要論 …… 四二
- 新著百種第八號 …… 六六
- 新島襄君は基督信者なりし乎 …… 六七
- 國民新聞の面目 …… 六八
- 彼の少年を如何んせん …… 六八
- ゆにてりあん …… 六八
- 京鹿子 …… 九六
- 京鹿子の評判記 …… 九七
- 紅懷紙 …… 九七
- 日本評論 …… 九八
- 染色雜誌 …… 九八
- 廢娼論增第一先登、上毛青年の初陣
- 學校衛生論 …… 一二四
- 星界劍遊記 …… 一二五
- 新々長崎みやげ …… 一二五
- 日本及基督教 …… 一二五
- 風俗陶の養生法 …… 一二五
- 遊女學校の事 …… 一二六
- 知識と信仰 …… 一五七
- ヂー、エル、ムーデー氏 …… 一五七
- 共力然榮 …… 一五七
- 世の中を賑かにする事 …… 一五四
- 存娼及實際論 …… 一八四
- 經濟及統計 …… 一八六
- 體育及び食物改良 …… 一八七
- 情にも弱く熱にも弱し …… 一八七
- 農哲林遠里氏 …… 一八七
- 廢娼 …… [illegible]一三
- 雜誌の時代新聞の時代將來の時代 …… 二一四
- 議訴與論 …… 二一五
- 大師國師 …… 二一五
- 國文政史 …… 二一五
- 同志社の發起者、設立者、創業者 …… 二一五
- 聾啞の敎育法 …… 二四四
- 小說史稿 …… 二[illegible]四
- 詩人ブラウニング（上） …… 二四四
- 同（下） …… 三五一
- 加藤弘之氏の道德論 …… 二六九
- みさほ人 …… 二七〇
- 普通國人 …… 二七一
- 女學雜誌目下の女子敎育法 …… 二九五
- 敎育普及の順序、女子の責任 …… 二九六
- 文學者として羅澤翁 …… 二九六
- 大器果して世に容れられざる乎 …… 二九六
- 朝と云へる詩 …… 二九六
- 要辨商機 …… 二九三
- 外山正一氏の美術論 …… 三二四
- 近來の名文章 …… 三二四
- 商權回復の實手段 …… 三二四
- 山縣有朋公の開化史 …… 三二〇
- 勝關 …… 三五〇
- 田口卯吉君 …… 三五〇
- 評詩 …… 三五一
- 日本文學全書を讀む …… 三八二
- 三評論 …… 三八三
- 十一新聞 …… 三八三
- 國文學讀本 …… 三八四
- 森林太郎氏の駁論 …… 四一一
- ぼたもち小說……駄菓子小說 …… 四一一
- 閨秀新誌 …… 四一二
- 女學生 …… 四一二
- 「天狗」の發行 …… 四一二
- 豐臣大閤の封冊 …… 四一二
- 科學の原理 …… 四一三
- 物理學現今の進步 …… 四一三
- [illegible]文學 …… 四一三
- 娼妓の味方 …… 四四二
- 時[illegible]が經濟始末 …… 四四二
- 矢野文雄氏政海退隱の記事 …… 四四二
- 西遊注記 …… 四四二
- 江湖新聞去らんとする乎 …… 四四三
- 女子政論 …… 四[illegible]三
- 近頃の女學文存 …… 四七三
- 詩日子の慈善論 …… 四七三
- 高島嘉右衛門氏、道德本源の說 …… 四七三
- 井上圓了氏、宗教改良論 …… 四七三
- 公生兒私生兒及び娼妓の數 …… 四七四
- 妹岳子を祭る文 …… 四七四
- 女學雜誌の短所 …… 五〇二
- 舊弊仏言 …… 五〇三
- 小牧陣始末批評の評 …… 五〇三
- 海江田翁大臣十二則 …… 五〇三
- 日蓮上人龍の口の事 …… 五〇三
- 家山の曲ならび江湖新聞を去る …… 五〇四
- 高橋是清氏の報告 …… 五二八
- 山縣伯に與ふるの書 …… 五二八
- 新著百種第九號 …… 五二九
- 江戶むらさき …… 五二九
- 浮城物語立案の始末 …… 五五六
- 一致教會憲法規則信條並附錄 …… 五五七
- 葉末集 …… 五五七

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

トルストイ伯の新著	五五八
能勢榮氏學校管理術	五八八
安寧策	五八八
議員列傳	五八八
報知新聞	五八八
江湖新聞	五八九
歸省	五八九
トルストイ伯	六一五
離緣權を剝奪すべし	六一六
歸朝后感慨	六一六
正行婦	六四四
吉野靜	六四四
冷風一拂	六四五
春江文章	六七〇
明治學院に對する記事	六七一
閨后の囁き	六七二
國會第一期の政治意見	六九八
自償投票論	六九九
日本評論の歐洲文學	六九九
詩仙を讀む	六九九
英文日光案內	七〇〇

雜錄

特に當代の文學者に望む	一二
離婚の可否、グラッドストンの說	一二
和歌よみ方	一四
本邦男女婚姻の年齡	一五
上州紀行（上）	一六
同（下）	七四
早起の事に就て	一六
若殿原に物申さん	一七
ひなかざり	四二
新島襄先生の歌	四二
西洋人のホーム	四三
想夫憐の解	四四
貧乏の原因	四四
同（續）	七五
赤兒に飲ます乳	四五
新工夫寫眞版	四五
東京府下各女學校女生徒國分表	四六
亡き姉君を想ふ	四六
家政學は一の學術なり	六八
懸賞文（女學生初て家を持ての經驗）	七二
同（花園女子の答）	二四五
同（露香女子の答）	二七二
同（昱子答）	二九八
同（相生子の答）	二九九
同（理想紳士）	四七七

同（同上）	五〇七
同（同上）	五六四
同（理想佳人）	五九六
同（同上）	四七八
同（同上）	五〇六
馬の爲に道を敷く	五三五
膓の養料	一八
きよめぬ庭（從順なる夫）	一八
同（續）	一九
同（幽靈の茶屋）	四七
同（救助の天使）	七六
同（續）	一〇四
同（繼母しき夫の爲にほどこす	一三二
脂肪減損法）	一六二
同（花ふゞき）	一九四
同（自惚の男）	二二一
同（產科醫の頓智）	二七五
同（大內の舞樂）	三〇三
同（夜學の純張）	三三一
同　つれ〴〵草のかきて	三九二
同（書てもよめぬわが文）	四二三
同（男容女魂）	四八〇
同（そのまゝ）	五三七
同（貨物の評判）	五六五
同（國自慢）	六二四
同（口は禍の門）	六五一
同（夏のそら）	六七九
輿論必しも是ならず	七四
其磧の手代氣質	七五
アッケルマン孃の演說	九九
おみなへし	九九
小說病	九九
和歌の浦波	一〇二
同	一五九
同	二二〇
同	三〇二
同	三六一
男女生徒の神經衰弱	一〇三
赤兒の睡眠	一〇三
安眠の時間	一〇四
閨秀小說家の答（小金井きよ女史）	一二七
同（樗女史木村榮子）	一五八
同（若松しづ子）	一八七
同（竹柏園女史）	二一六
同（花園女史）	二四七
青年の力	一二八
廢娼論につきてよめるながうた	一二九
小說病補遺	一二九

小兒に藥劑を飲ます事	一三〇
遺傳の話し	一三一
羅馬は一日にて成らず	一六〇
命は食にあるの說	一六一
先づ人を信ずべし	一六一
都の花信	一六四
モロカイ島の新ダミエン	一九〇
同（續）	二一七
政治家は君子ならざる可らず	一九二
獨身者の弊	一九三
ブラウニングの逸事	二一六
敬字先生の詩	二一九
智力の遺傳	二一九
おかげ參り	二二〇
教育的小說	二四七
櫻井勉夫人の葬式	二四八
櫻井勉夫人高田八重子君の傳	三五七
櫻井八重子の墓にて	四四六
弔詞	三六〇
樂しまんが爲なり	二四九
世の中は	二四九
家の手わざ（鷄の種類）	二四九
同（にわとりの蕃殖方）	二七七
同（にわとりの家舍）	三〇五
同（羽虫の驅除）	三三四
同（鷄の養ひ法）	三六二
同（飼料の事）	三九三
同（養鷄月々の仕事）	四二一
同（續）	四五二
同（養鷄心得の追加）	五〇九
春遊亦平和ならず	二七一
豪傑はホームを切要す	二七三
貴婦人と貧民	二七四
不思儀の謎を解明す	二七四
結婚は人類の大倫	二七五
英詩和譯（荒菴）	二七七
胸中塵なし	二九七
僞わりの歌	二九七
愛は淺ろとなし	二九八
宮川靜井孃のこと	三〇〇
嗚呼浮世	三〇一
大人と爲らんには	三〇五
文字と馬鹿	三〇五
家庭の風色	三二五
同	三八五
春と秋と孰れが善き	三二七
齊の桓公、武藏坊辨慶	三二七
一席夜話（理窟と人情）	三二八
同（賴みになると云ふ事）	三五六

同（長者の心得）	三九一
死期の青年	三二九
太田榮子の傳	三三〇
スチーリングの淡泊	三三二
ハワードの死	三三三
高等女學校教師プリンス孃	三五二
ブラウニング終末の詩	三五二
羽織を着換たり	三五四
ラーッ夫人の謝狀	三五四
七人以上子女を擧げし者	三五五
南京米の炊き樣	三五七
五感のはたらき	三六三
無用の事には拙なけれ	三六三
希臘人の躰育	三八七
西京同志社に於けるモリス夫人	三八七
演說	三八九
其男を叩き殺せり	三九〇
門出	三九四
近藤賢三君四周忌	四一四
豐田芙雄女史を訪ふ	四一七
女性冷待の文學上に於ける影響	四一七
改革者の一要素	四一八
聖人の恨	四一八
謹しみて苦しみ侍らん	四一八
盜賊の入りし時小女の行狀	四二〇
無名氏の寄附	四二〇
士にて粥を造る事	四四三
貧民の慘情天下の仁士に告ぐ	四四七
「女學生」に還す	四四七
百尺竿頭一步	四四八
慈善家ホイトチー氏一家を訪ふ	四七九
同其二	四四九
白粉の害	四五二
三宅雄二郎氏の演說	四七四
青井榮孃を訪ふ	五〇四
同	四七六
心高ぶり思ひ過ぐすと勿れ	五〇五
俊寬	五〇六
貧家一盆の義食	五〇七
富めるものに眞の盜賊あり	五〇八
今の產婆、今后の產婆養成	五一〇
跡見花蹊女史を訪ふ	五三四
同（其二）	五三〇
養育院を見舞の記	五三三
歌をよみ候は如何樣の書にたよりて學び候はんや	五五八
新島襄先生未亡人を訪ふ	五六〇
愛國と美術	五六〇
義務	

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第二百二十七號附錄

賤の身の果　五六一
革命は子供が文字書く似し　五六二
佛國の慈善家三婦人の傳　五六二
靜女塾主、平尾光子女史を訪ふ　五九〇
同（二一）　六二二
同（二二）　六四五
人情　五九二
さびしさ　五九二
コレラの好む所　五九三
今は採集の時なり　五九三
女性の言葉つき　五九四
吉田松陰先生の女論　五九五
簫シヤレを言ふ　五九七
慈惠醫院を訪ふ　五九七
家有る后ち一年の感　六一七
富國の基ひ家政科の教授に在り　六一八
深夜の星　六二〇
同　六七七
同　七〇七
人殺ろし　六二一
雛める人の爲に勵む　六二一
躰を洗ふ事　六四七
倫理問答　六四七
摸倣文學　六四八
ミルトン傑作の生る所以　六四九
知事の細君に貧民の食を嘗しむ　六五〇
食物と溫度　六五〇
れふたニッ　六七二
女子文學者　六七四
クーパーの詩　六七五
小松崎古登女を訪ふ　六七五
同　七〇八
口に毒ある人　六七八
英國上流の貴婦人、一日間の暮し方　七〇一
西行の歌　七〇三
暑中見舞　七〇四
月は出でぬ　七〇四
神を畏るゝといふ事　七〇四
神意は親の爲に殺さる　七〇五
芭蕉の句　七〇六

小說

イナック、アーデン物語　二〇
同（續）　四九
浮世の波間（七）　七八
同（義）　一〇六
同（禮）　一三六
野邊遊び（第一）　一三四
同（第二）　一六五
同（第三）　二二三
同（第四）　二五〇
同（第五）　二七八
同（第六）　三〇六
同（第七）　三三五
同（第八）　三六四
うき世　三九五
同（其二）　四二四
同（其三）　四五三
同（其四）　四八二
同（其五）　五一一
同（其六）　五三八
同（其七）　五六七
同（其八）　五九八
同（其九）　六二六
同（其十）　六五三
同（其十一）　六八一
同（其十二）　七〇九

寄書

水車と姦淫公許　二二
小說に付ての述懷　二二
流行　二三
武藏野　五二
失意歎　五二
今様姫君様の御勢揃　五三
日出と處の歌　五三
讀賣新聞女生に關する記事を讀みて　三五
婦人と文學の末路　七九
ベルツ先生の存娼論　八〇
肥田野八重子の履歴　八〇
祖君の教へ、粹の譬へ　八一
日本新聞記者に望む　一〇八
寒さ　一〇九
幼な子と詩人　一〇九
孤島の囚人　一〇九
春日の感　一三七
黒川眞頼氏の遊女の話の筆記を讀む　一三七
小品漫筆　一三七
同（續）　一六八
同（續）　三九八
國民悉皆醫者となれ　一三八
舌の御施走　一三九
再び「つぼみ」雜誌を讀て　一六七
五長　一九六
河野梓子傳　一九六
漫言一則　一九七
淫用物の賣買嚴禁すべし　二二五
蓄妾の弊　二二六
米國費府の慈善家「モリス」氏　二五三
春　二五三
坐右日記の一節　二五四
風前雨裡春空老　二五四
泣かんか笑はん乎　二八一
文學史の第一着は出たり　三〇八
敢て申す　三〇八
文明と詩歌との關係に就て女學雜誌記者に質す　三〇九
女醫學生　三三七
常に無き女生　三三八
女學生出校して居……　三六六
なさけあれや　三六六
咄々怪事　三六六
谷小河　三六七
養鷄に就て　三九八
すみれ草　三九八
民は飢たり妾は醉たり馬は肥たり　四二七
落語　四二八
あゆみし道　四五六
千行の血涙　四八四
眞誠の詩人　四八九
思ひ付たることども　五一四
同（其二）　五七一
同（其三）　六〇一
避暑地案内（上）　五四一
同（中）　五七〇
同（下）　六二八
美服人の指ざゝんとを悲ふ　六二八
世の貴婦人に訴ふ　六五五
華族女學校卒業式に於ける學監下田歌子女子の演說　六八三
思ふまゝ　六八四
女學子に與ふ　七一二
憂慮するなかれ女子教育　七一二

開書

愛する諸姉に申します　五三
閨秀の寫眞　五四
天下同胞に訴ふ　八二
有樂堂主人へまいらす　一〇九
再び有樂堂主人にまいらす　二五四
女學子に與ふるの書　一三九
常盤木千代子に答ふ　一六八
東の都淺草はしのほさりに住ませ玉ふ章子の君に　一九七
諸孃の履歷を問はん　一九七
ラーシ氏を送り、同夫人を慰さむ　二二七
東洋英和女學校の女生諸君に告ぐ　二二七
東洋英和女學校內變の事　二三八
容貌の事　二八二
我儘せぬ事　三一〇
今日に至り御社御風に輸か、謝ふ　三三八
友人の慈善に感じて我同胞兄弟姉妹に告ぐ　三六八
貧民を助けよと祈る　三九九
講義錄の爲一言御申上げん　四五七
横濱無名氏の答書　四八五
偶感　五一五
清水豐女史に與ふ　五四二
浮世の筆者に與ふ　五四二
みれ子の君に返す　五七一
被撰失撰の諸君に參らす　六〇一
女學孃し誕辰を賀す　六二九

時事

日本婦人　二四
米人吾等が同胞姉妹を許す　二四
アッケルマン孃來る　二五
政黨に入りかたき人種　二五
東京監獄　二五
天上天下　二六
嗚呼ラスン君！　二六
世界週遊の兩女子　二六
惡しき風　二五
女學生の風聞　五五
風聞の出處　五五
出處の製造元　五六
よし之ありとするも　五六
社員、アッケルマン孃を訪ふ　五七
谷將軍の女論　八三
女學生の風聞と日本、讀賣の二新聞　八四
「日本」新聞
日本新聞に望む　一一一
一陽來復　八五
讀賣新聞の應答　一一〇
少年婚風軍　一一一
閨秀二女史逝く　一一一
女流の演說　一一三
勝海舟翁　一四一
福澤諭吉翁　一四一
文部者中其人なし　一四二
不德の教師　一四二

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

學校と教會	一四二
高等師範學校	一四三
序文、目錄、小引	一四三
日曜日安息の事	一四三
博士外山正一先生の演說	一六九
外山正一君	二五六
上毛の青年	一七二
女學生の風聞	一七二
新聞紙に四權あり	一七二
印刷局の勞働時間	一七二
勞働保護者	一七二
女子高等師範學校長中村敬宇先生を訪ふ	一九八
師範學校女子部內の基督信徒	一九九
慈善家モリス氏夫婦	二〇〇
怪文字	二〇〇
新聞紙の不德	二〇一
嘖々怪事	二〇一
皇后陛下、養蠶を見玉ふ	二一七
同志社新校長	二一八
群馬縣廢娼事件收局（？）	二一八
時事の廢娼論	二一九
七十五日	二一九
氣の流行、假の流行	二一九
今后天下太平	二五五
櫻散る	二五五
三[illegible]三色	二五六
宣教師方の女學校	二五六
其改良一節	二五七
僧侶の議決	二五七
骨道頂稿	二五七
夫の淩辱	二五七
支那の井上馨君	二五八
ビスマーク公	二八三
板垣退助君東京に入る	二八三
廢刀道	二八三
調和青年同盟會	二八四
僞を作るもの狹なし	二八四
慈善有志青年諸君に謹告	三一〇
撰擧さわぎ	三一一
愛國公黨	三一一
賽の河原	三一一
町奉行と町人	三一一
文部大臣	三一一
モリス氏夫婦貴婦人社會に嚮導す	三一一
女界新客	三一二
還御を迎へ奉る	三三九
學頭皆空々	三三九

貧民救助	三三九
起てよ、姉妹	三三九
復歸	三四〇
調和に贊成す	三四〇
調和に反對す	三四〇
調和の調和	三四〇
輿論囂々	三四〇
小女賊に說教す	三七一
小刀改革家	三七一
鍛冶者の末路	三七一
提燈の出來事	三七一
キングスドウター	三七一
[illegible]救助會	三七二
政治風針	四〇〇
改進せよ	四〇一
山林必しも靜ならず	四〇一
群集に於ける西洋人	四〇一
多望快好	四〇一
樹を植ゆ、人を植ゆ	四〇一
政治	四〇一
宗教	四二九
大學新總長	四二九
生徒及雇人の不自由	四二九
現今の佛教女學校	四二九
存娼家の一策	四二九
政談と學術演說の區域	四二九
希望	四三〇
女學上反動	四三〇
幾回選	四三〇
開化史	四五七
日下政海の最大美事	四五七
義人の涙	四五七
無上の說教	四五七
天使の寬行	四五八
今の德育法只一	四五八
本年	四五八
官立女學校を全廢すべし	四八六
政府と教育	四八六
府知事園遊會	四八七
君子逝けり	四八七
奏任以上の官吏に白す	四八七
敢て內閣に望む	四八七
外國米買入	四八七
和らかんが爲なり	四八八
婚は依然として細し	四八八
經濟家の慈善論	五一六
凶年且損年	五一六
美人獨座	五一六
こがひ	五一六

信なきにありさ	五一六
夏の日の詩人	五一七
各宗管長會議	五一七
產みの苦しみ	五一七
樂ひ哉	五一七
農科大學	五一八
女學生間發生の時季	五四三
三日後の瘋狂者	五四三
新聞紙上の餘裕	五四三
貧民學校	五四三
婦人矯風會風俗部	五四三
夏期學校近づく	五四三
新同志社校長に諮を寄す	五四四
押川方義君	五四四
明治學院	五四四
邪統惡義	五四四
醜業、藝妓、藝妓代女學生	五七二
七月五日	五七二
今后	五七二
社會改良の問題	五七二
行政裁判所	五七二
新聞紙	五七二
女學生の歸省を送る	五七三
子守練習所	五七三
コレラ	五七三
日本婦人	六〇二
獨逸の女學	六〇二
大上獄中の默念	六〇二
此度の選擧	六〇二
市中の君子	六〇二
明日	六〇二
非草非木	六〇二
何の日か濟まん	六〇二
疑獄行	六〇二
田口卯吉君惡るし	六〇三
托鉢	六〇三
米國女子撰擧權擴張會	六三一
卒業女學生（一）	六八七
同（二）	六三〇
同（三）	六三〇
條約改正	六三〇
日本人を殺せし罪人	六三〇
メソヂスト婦人年會	六三〇
閨房のさゝやき	六三〇
議員上京の折は	六三一
文明國に野蠻人多し	六三一
佛國に於ける佛徒	六三一
衆議員中の信徒	
婦人雜誌	

逆外國	[illegible]
女學反	[illegible]
板垣退助君	[illegible]
日月と芙蓉	[illegible]
福澤翁、故新島君	[illegible]
暑きに謝す	[illegible]
學生及世界	[illegible]
日本財務明日より亂雜せん	[illegible]
井深梶之助君	[illegible]
新らしき集會及政社法	[illegible]
是れ政談	[illegible]
研究せんと欲す	六八五
縱は流水の如し	六八五
博覽會女人禁制の場所	六八五
子守堂若衆倶樂部	六八五
結婚媒妁所統計	六八六
世間忙々	六八六
何處に同志者ある	六八六
此頃の新聞紙	六八六
雜報の遣り手	六八六
ギウリキ女史	六八六
ピアノ及びチルカン	六八七
禁酒上大運動	六八七
フホーセット女史の名譽	六八七
政治は海邊の細砂に似たり	七一三
電話交換	七一三
高山偉人を生す	七一三
彼岸	七一三
淡々	七一三
官奥留守の役と傳道職	七一三
同しに批評家と爲らん	七一三
新政社集會法に對し	七一三
晉士亞政府に對し	七一三
今の事業	七一三
徽蟲自から縛す	七一四
虎列剌豫防の心得	七一四
米國訓育院	七一四
亞片禁止同盟會	七一四
寄宿舍	七一四
女散髮師	七一四
男女共和國	七一五

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學則は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良なり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地　**東洋英和女學校**

廣告

●○脚氣患者諸君よ左の○●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

官許専門　天下無比　**かつけ根切灸點術**

附言輕症は一二度如何なる重病と雖ども四五度限り全治受合○灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り　**壽福堂**

本校來る九月一日より授業を始め豫科本科各級へ新入生を募集す有志者御申込あれ

東京市芝區三田功運町三拾番地　私立　**普連土女學校**

華月館詩文添削批評規則

第一條　詩文ノ添削批評ハ丁寧精密ヲ主トシ吟誦ノ間作者ヲシテ容易ニ詩文ノ秘訣ヲ曉得セシメンコトヲ勉ム

第二條　詩文ノ添削批評ヲ屬托スル者ハ各自隨意ノ謝料ヲ草稿ト同時ニ爲替若シクハ郵券ニテ送附スベシ

第三條　傑作ハ新聞雜誌ニ登錄シテ作者ニ寄贈ス

第四條　入館金五十錢前納スル者ヲ華月館友ト爲シ證票ヲ付與ス

第五條　館友タル者ハ滿六箇月間毎月文二篇詩五首限文體詩體ヲ問ハズ無料ニテ添削批評ヲ屬托スルヿヲ得但文ノミナレバ毎月五篇詩ノミナレバ毎月十首限トス

第六條　入館金三拾錢前納スル者ハ滿三箇月間館友ノ資格ヲ有ス

第七條　館友ハ詩文上百般ノ難疑無料ニテ質問スルヿヲ得ベシ

第八條　返稿期限ハ館友三日以内其他ハ五日以内ト定ム

陸奥國弘前百石町　**華月館　河村巖城**

女學生募集

本校豫科本科ニ入學志願者ハ九月八日迄ニ來校アルヘシ校則入用ノ方ハ郵券二錢ヲ送ラハ呈スヘシ

仙臺市東三番丁七十五番地　**宮城女學校**

女學生第四號

二十一日發兌 每月一回發兌

●社說○清酢、活計(下宮子)○知れ何ぞ求懲の如し(天知子)吾人が批評を試みる所以(雲峯生)●文綱○婦人の勢力(安藤たけ子)○史論(安川岩子)○見かけ倒ふ(すみれ)○雛の歌所(森田千子)○御夏漫筆(佐藤増子)○松島記(中谷早苗子)○說毅記(田中ひさ子)○生氣(赤川たつ子)○何たる問化といふや(前島規矩子)○女子の心情(石黒真子)○和歌五首(跡見女學校)教授の利害(丸岡ます子)○獨修の說(神川ひさ子)○花の記(竹下つま子)○静性の眞假(英文)(三浦れん子)○英文批評(ひかり)●寄書○錢齋閑日月(平山すとし)○和歌四首○小說反魂香(横山人)●公評○俳諧三句(細木椿)○横山人の反魂香(及川女史)○女學生に寄す(琴き)(四の部まこと)○湊國を讀む(吉川榮子)○恐れながら(廣井さき子)○女學生第三號を讀みて(常盤木久榮子)○文鋼の小ごと(暗夜山人)●女生交詢○新題四問○第二、三號答案●課武欄○組手(風柳窓)●報告數件●廣告

●私立明治女學校 生徒募集 並 移轉廣告

女塾の通弊を憂ひ、此度び、家族主義、一名、別舍主義と稱する、新なる塾舍の管理方を工夫し、校内に小舍を別々に設置し、一舍に十人以下の塾生を容れ、主婦一名を添へ、料理家政の事を實際に行はしむ、即はち塾舍を一家族の如くにするの主意なり。之が爲めに、本校從來の地手狹と爲り、且つ別に本校の都合あるを以て、此度び麹町區下六番町六番地に移轉し、講堂及び塾舍を新築す。但し始業は例年の如く九月十日の事。學年始めに付、級下級以上の各級に新入生を募る有志の人は九月八日迄に申込あれ。校則入用の向は郵券二錢封入の上通報ある可し。

東京市麹町區下六番町六番地

明治女學校

京都府今出川 同志社女學校生徒募集

本校は九月十六日より授業を始む入學志願の方は九月十日迄に申込あれ規則入用の方は郵券二錢を添へて御申込あれば早速送達すべし

●正教新報

第貳百三十三號八月十五日發行 ○一冊郵税共金四錢五厘

論說 人間と動物の差異○埃田園と動物園○特別寄書○傳教師司祭の增立を論じて供給法實施の急務を說く●寄書○大日本正教青年會の設立を祝す **雜錄** 神の公義の基督に依て滿足せられしと○人躰の組織○神の恩惠は萬物に皆し○インノケンチイ師の司祭教訓書○教會は一なり●詞藻●文苑○名說○其他和歌數首●漫筆○神官の紛議に就て○無形の良藥○其他 **雜報**●日本正教會記事○司祭叙聖式○其他數件○露西亞紀行摘要

發行所 東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地 愛々社

定價				
一冊	六錢	郵税一錢	(但府内無郵税)	
十冊	五十八錢	郵税十錢	(同前)	
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓六十九錢	
一年分	二圓六十錢	府外は	三圓十二錢	

廣告			
一行	一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 森田豐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY